
じゅぶないる作文クラブ

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じゅぶないる作文クラブ

【Nコード】

N9220V

【作者名】

上葵

【あらすじ】

目標もなく自堕落な日々を送る少年の趣味は暇潰しに小説を綴ること。彼の小説を秘密裏に手に入れた稲葉冥利はいつしよに小説を書こうと提案を行う。

夏がくる前に（前書き）

いまいちジャンルがわからない作品ですが、どうぞお願い事致します。

夏がくる前に

梅雨明けを迎えた天気は目が眩むくらい輝いていて、開け放たれた窓から夏の気配がゆったりと流れこんできていた。ほんの小一時間前、喧騒に支配されていた教室は、夕刻をむかえ不気味なほど静まりかえっている。

「ドツキリならさっさと見えよ」

理路整然と並ぶ机、上履きの黒ずみが残る通路、それらを挟んで制服姿の二人の男女が向かい合って立っていた。

先制攻撃のようにトゲのある語調で口を開いた少年、結城裕也は自他ともに認める平凡な人間だ。これといった特技はないし、スポーツに恵まれた体格や何か秀でた才能も、授かることができなかった。趣味は読書や映画鑑賞とありがちで、成績や学校生活等、すべてに置いて並な評価を受けてきた。卒業後は誰の記憶にも留まることなく在籍記録はただのデータになりはてるだろう。

生きてきた14年で最も目立ったエピソードは、小六の修学旅行を風邪をこじらせ欠席し、卒アルに別窓が添えられた事くらいだ。

そんな着にも棒にもかからない人生を歩んできた彼の下駄箱に通のメモが置いてあった。女子特有の可愛い丸文字で『放課後教室に残ってください』。

モテるようなタイプではないし、顔立ちもこれといって誇れるものではない、人生に三度訪れるというモテ期は胎児の頃に終えているわけで、このメモがラブレターでないことくらいとうに見破っている。

分析を数秒で終わらせた凡庸な一中学生にすぎない彼は、なんかやかで教室に居残るといふ選択肢をとっていた。

「ドツキリ？」

首を傾げたクラスメート、稲葉冥利は優等生だ。丸みを帯びた柔らかな頬、目鼻口一つ一つのパーツが均整に配置されていて、端正

な顔立ちは人を引きつける魅力に溢れていた。その一方で特定の人と長く絡むことはなく、宙ぶらりんな存在として二年一組の生徒から認識されていた。

「下駄箱のメモ、稲葉が入れたんだろ」

「うん。来てくれて良かった」

「だったら早く言えよ。俺だって暇じゃないんだ」

「用事あるの？」

「いや、なんにもないけど……」

放課後の教室には稲葉冥利と二人きりというイベントが配置されていた。青臭い青春劇が始まるような鼻の頭が痒くなるシチュエーションだ。

しかしながら懐疑主義者を自負する結城には、彼女の後ろの掃除用具入れが開いて馬鹿な友人が飛び出してくる可能性を捨てきれずにいた。

稲葉冥利の捉えどころのない雰囲気はミステリアスと称され、実際男子からの人気も相当数ある。隠れファンを多く獲得している少女が、俺みたいな日陰者に裏心なしに声をかけるとは考えづらい。

「やっぱり人前でこういう話をするのは気が引けて」

看板持ってドッキリでしたー、という気配はないが、結城は未だに猜疑心を拭えずにいた。

「1ついいか？」

煮え切らない態度に、とぼけてみるのもパターンとしてはアリだが、鈍感を気取らずストレートに終わらせて、イタズラだった時の心のダメージを少なくしようとする彼の唇は迅速に動いた。

「告白だよな？」

「こくはく？なんの？」

「いや、だから、愛の……」

「え？」

「ち、違うのか？」

「あ、そっか、あの書き方じゃそんな風にもとれるのか。えっと、

わざわざ残ってもらったのは告白する為ではなく」

「じゃあな。窓閉めとけよ」

傷ついた心を隠そうと一歩さげた右足を軸に、綺麗な回れ右する。体育教師がこの場にいたら、教育の賜物だと泣いて喜んだだろう。

「ちよ、ちよっと待って」

立ち去ろうとする彼の背中に、稲葉は声をかけた。

「話は終わっていない」

「付き合っしてほしい、ってわけじゃないんだろ」

「うん」

「……」

蝉時雨にはまだ早い向暑の夕暮れ。気のせいとはわかってはいるが耳にヒグラシの切ないメロディーが響く。

虚しく肩を落とす結城に、稲葉は微かに口角をあげ一冊の薄橙色のノートを差し出した。

「これ」

「あ」

見覚えのあるかすれた表紙。視界に収めた途端、顔に熱がのぼる。彼にとって、それはある種の爆弾だった。

「な、なんで……？」

「前々から気になっていた。反応を見るにビンゴみたい」

「まじかよ」

A4サイズで罫線が入ったオーソドックスな学習用ノート。名前欄は空白になっているが、今週のはじめ無くした結城裕也の所有物に間違いない。

「ああ、俺のだ」

耳まで赤くし、彼女の手からノートをひったくる。

中には自作の小説が長々綴られていた。

連続殺人鬼アイスピック男に孤独な戦いを挑む少年の話だ。構想プロットオール無し、ただ思いつくままにシャープペンシルを動かした、作品と呼ぶに呼べない代物、授業中の手慰みだ。

視線を合わせぬようパラパラと捲りながら、結城は精一杯平静を装った。

「ひよっとして読んだか？」

「うん。面白かった。ただあのラストはないと思う」

「うるせえ、めんどくさくなったんだよ」

「そこが少し残念だったけど、差し引きしても余りあるプラス、とても楽しめた」

「てらうことのない真っ直ぐな評価に言葉を失い、彼は唇を引き結んだ。

あまりの恥ずかしさに脳内で悶える彼の裾がちょっと引つ張られる。無意識のうちに帰宅しようとしていたらしい。

「もう少しだけ話を聞いて」

「……ノートサンキューまた明日、これでいいだろ？」

「私は落とし物を届けるためだけに、あなたに残ってもらったわけじゃない」

同じクラスになって2ヶ月ほど経つが、元の面識なんてあってないようなものだ。互いに顔見知り程度の仲で、それ以上も以下もない。

「1つ頼みがある」

彼女は少しだけ強張った声で続けた。どうやら緊張しているらしい。

「今から私と一緒に小説を」

「嫌だぞ。絶対に嫌だ」

「まだ最後まで言ってない」

「俺のノートからの話題なんてロクなもんじゃない。そうだろ？」

「二人でアイデアを出し合って小説コンクールに応募しよう」

「ほらろくでもない」

嘆息ぎみに結城は呟き出口に向かって歩きだした。

「あのノートを読んで確信した、結城には文才がある」

かん高い声でこっ恥ずかしい誉め言葉を高々と言い放つ。人気

ないのがせめてもの救いだ。

「私にはないアイデア、構成、キャラクター、どれをとっても引き込まれるものだった」

「お為ごかしはよせ。ヨイショしたところで協力はしないからな。かつたるい」

「違う、埋めるには勿体無い才能だと思った。読んでもらいたいからあの小説を書いたんでしょ？」

「ただの暇つぶし。そもそも下手に他人に手垢つけられるより、最初から自分だけで頑張ったほうが完成の喜びも一入だろうぜ」

結城は彼女を無視し、ドアに手をかける。これ以上話をしても埒があかないと判断したのだ。

ドアを開ける前に、無言になっていた稲葉冥利は静かだが語気のある声を上げた。

「世の中に発信者と受信者という二種類の人間がいる。私は生つ粋の読者だから、一人では書き手にはなれない」

「どつという意味だ」

「読めば読むほど、自分に心がないと浮き彫りにされた。私には文才がない」

「頑張れ。努力でカバーしろ」

冷たく言い放たれたが、彼女はたじろぐことなくピシッと背筋を伸ばし、選手宣誓のような朗らかさを持って彼の瞳を真っ直ぐ見つめた。

「あなたの文章は私の心に確かな感慨を芽生えさせた。結城裕也には筆力がある。発展途上だけど人が書けない文章とアイデアを持っている、協力をお願いしたい」

誉められて悪い気になる人はいない、とはいえ慎重に対応しなくてはならない事柄だと揺らぐ心を冷静に見つめ返す。

「断る。お前の気の迷いに付き合ってやるほど、俺の度量は深くないんだ」

「さすがに一筋縄ではいかないか」

思い通りに事が運ばなかったから不機嫌になった、というわけではなさそうだ。小さく息を吐いて稲葉冥利は独り言を言うようにぼそりと呟いた。

「予定では喜び勇んで賛成してくれるはずだったのに」

率直な意見を鼻でせせら笑う。

「ありえん。そんな軽く見られてるなんて心外だな」

「やった、女の子と会話するなんて一年ぶりだ！はい協力します！みたいな」

いままでの会話で一番明るい声をだされ、一瞬身動き出来なくなつたが、それが人を小バカにした演技だと気付いて微かにトサカに来るものを感じた。

「お前は俺をなんだと思ってるんだ？人を敬う気持ちを感じられん」

「あなたは人間味が少しだけ薄い。真心が足りない」

「どつちがだ」

呆れを吐き捨てるように、再び教室のドアに手をかける。

くすんだ白い扉を開け、オレンジ色の日差しが差し込む廊下に歩みを進める。「待つて、もう少しだけ」

敷居を跨ぐと足をあげたところで呼び止められ、嫌々ながら無視するわけにもいかず、鼻で息を吐きながら足をゆっくり下ろす。

「どれだけ頼まれようと返事はノーだ。人のノート勝手に見といて押し付けがましいと思わねーのか」

「仮にも落とし物届けて上げたのに」

「感謝してはいるが恩着せがましいとは思わねーのか」

「文脈がちよつと変わっただけじゃない」

蝉はまだ土の中で気合いを溜めていて、辺りは静けさに支配されている。静寂を切り裂く少女の華やかな声、乗り気はしないがしつこいと一蹴するには忍びなかった。廊下を背に振り向く。

「んじゃあと一分だけ話きてやるから、それで諦める」

言い分に耳を傾けるだけで、賛同する気は微塵もなかった。

「ありがとう。結城、私といっしょに小説を書こう」

「だから嫌だつて言ってるんだろ！人の話きけ！せめて言い方を変え
るとか工夫しろよ！」

怒鳴られたのに気にする風もなく、「んー」と上目づかいでなに
やら考えていた彼女はやがて握り拳を手のひらをぼんと受け止める
古典的アクションをとってから口を開いた。

「一つ提案がある」

「ほう」

楽しそうな声をあげ人差し指をピンとたてて結城の眼前に近づけ
た。

「ゲームをしよう」

一瞬の沈黙に微かな色があることに気がついた。プラスバンド部
の演奏が遠くサンクガーデンから確かな音を風に乗せて二年生の教
室まで届かせている。 テッテレー。それはさながらドラえもんが
秘密道具を出した時の音に似ていた。「ゲーム？なんのゲームだ？」
かくれんぼ、鬼ごっこ、缶けり、ドロケイ、身体を使った懐かし
の遊びから最新のテレビゲームまで、脳内をぐるぐ
ると単語が巡る。

「負けたら勝者の言うことをなんでもきく」

「よしやるっ」

即断即決だった。

「……さっきまでの断固とした拒絶の態度は？」

「グダグダうるせえな。ルールは？」

曲がりなりに相手は美少女と名高い稲葉冥利。クールな態度を
取りながらも思春期少年にはいささか刺激が強すぎて、自制心に悶
々とした感情が一瞬だけが勝ってしまったのだった。

「ルールは古今東西ゲーム。テーマに沿った回答をリズムに合わせ
て交互に言い合っていく」

「ふうん。お題は」

勝った時、どんな命令をしようか。口調は冷静だが脳内は不純物
に溢れていた。いかかわしい妄想は男子中学生の常である。

「うん。……よし」

また手のひらを叩き合わせてから続けた。

「虹の色にしよう」

「……」

彼はあくまで冷静だった。

「それじゃ私から。赤」

「おいちよつと待て」

タイムにたじろぐ。

「な、なに？リズミカルにやらないと失格だと言って」

「七色じゃ全部言ったって絶対先行が勝つじゃないか」

「ち、小さい事にこだわるね」

「人を舐めくさるのも大概にしるよ。やってられるか」

稲葉は結城を勝ち目のないゲームに乗せ、小説を書かせたらしい。それを看破した彼が彼女の口八丁に付き合うの危険極まりないだろう。

「文化や時代によって虹の色は数は変わり、沖縄では二色だし、七色と決め込むのは紋切り型というか」

なにやらグダグダ言っている彼女を無視して、十字架のような窓枠の影が落ちた廊下に歩みを進める。

「待って、ラス1」

ここまで来るとさすがに疲れてくる。

「しつこいな。気まぐれタイムは終了したの。ちょうど一分位だしな」

彼の後に続いて稲葉も廊下に飛び出た。

「春の七草で勝負」

結城は無言で振り向いて、三白眼がちの目つきを輪をかけて悪くした。

「うっ、あ、秋の七草」

「黙れ」

「ギニュー特撰隊！」

「帰れ！」

彼の一喝を涼しい顔で受け止めた稲葉は徐々に小さくなって行く彼の背中に声をかけた。

「今日1日考えて明日また返事をちょうだい、それでダメなら諦める」

全く災難だ。

結城は小さくため息をついた。美人につきまとわれるのは嬉しいが、相手がぶっ飛んでるとなると話は違う。

窓の外には夏に向かって赤色の飛行機雲が真っ直ぐに伸びていた。

駐輪場にて

稲葉と別れ駐輪場にやってきた結城は、小学生の頃から乗り回している愛車のチェーンを外そうとしゃがみこんだ。

6段変形のギアシフトは5に固定されていて、ブレーキをかけるたび悲鳴を上げるようになっていいる。やりもしないメンテナンスについて考えながらチェーンに鍵を差し込んだところで後ろから声をかけられた。

「やつほー。イカす自転車乗ってんねー」

しゃがみこんだまま振り向くとシヨートボブを金色に染めた派手な女生徒が立っていた。制服は注意されない程度に改造されていて、至る所に可愛らしいアクセサリーが留めてある。見た目はギャルだが、不思議とケバケバしさは感じなかった。逆光となって表情は窺いしれなかったが、茶色に浸食された自転車を誉めるなんて冷やかし以外にありえないだろう。

「ドンキで二万円だった」

「ありやそう。ふふーん。安くていい仕事してるなー。君もそう思うでしょ?」

「あんた誰だよ」

帰宅部なら遅すぎるし部活なら早すぎる中途半端な時間帯。帰宅ラッシュは終わり、彼の自転車の周りには一台も停められていない。「あたしは二年四組の日向葵。気軽にヒマワリってよんでね」

「ヒナタ? 日が向かうって書いて日向だったら、ヒマワリにならないじゃん」

ヒマワリは漢字で向日葵だ。ヒナタアオイでは、ヒマワリとは読まない。

「細かいことは気にしないー。そう言う君は?」

「……結城裕也」

一瞬名乗るのをためらったが、素直に本名を明かすことにした。

「ユウキユウヤか。うーん明日までにあだ名を考えるからちよつとまってるね」

「ごめん被る、と素直な気持ちを吐露する代わりに彼は左手に留められた腕時計を彼女に見えるように指し示した。

「時刻は17時を回ったところです」

「派手な容姿をしたタイプが苦手なのだ。できることなら会話を打ちきり、早々に帰宅を開始したい。

「別に時間を訊きたいわけじゃないんだけど……、すこーしだけ話を聞いてくれるだけでいいんだよね」

「稲葉とのいざこざで虫の居所が悪い結城にとって、面識もない赤の他人からのその言い回しは鼻についた。

この日向という人物、自分の自転車があるから駐輪場にいるというわけではなさそうだ。わざわざ他クラスの生徒を呼び止めなければならぬ理由なんてあるのだろうか。

「もしかして告白か？」

「そんなわけないじゃーん。初対面だよあたしたち」

「……まあ、そうだろうな」

わかっていたこととはいえ、ヒグラシの切ないメロディーが彼のエウスタキオ管を超高速で通過した、気がする。

「んじやなんだよ。要点だけ掻い摘んでさっさと見えよ」

「そうだねーそのほうが手っ取り早くすむしね」

「明るい調子で彼女は続けた。

「イナバミヨウリとは付き合わない方がいい」

「は？」

その固有名詞が先ほど教室で二人きりだった『稲葉冥利』を指していることに気づいたのは数秒が経過してからだった。

「い、一組の稲葉冥利か？」

「いえーす。そんな変わった名前、あの子くらいしかいないしね」

「なんで四組のあんたがあいつの事を気にかけるんだ？」

「んー、説明すると複雑だから、秘密つてことにしといて」

意見追隨を許さないストレートな黙秘権の行使、知り合いでもない他クラスの男子生徒に忠告を行うプロセスを無粋な好奇心から推理してみるが、これといった動機は思い浮かばなかった。

1つだけいえることはこいつは放課後残るよう稲葉にお願いされたことを知っているのだろう。でなければ、ここで俺を呼び止める理由がわからない。

「勘違いしてないか？さつき教室で稲葉とした話は告白なんかじゃないからな」

「カップルとして付き合う以前に稲葉冥利とは関わり合いを持たないほうがいいよ、って言ってるのさ」

「ますます意味がわからん。稲葉の勝手だろうが、お前があいつの人間関係制約する理由なんて、……ま、まさかお前っ」

独自の回答に行き着き荒れた彼の言葉尻に、一瞬だけ日向葵の表情はこわばった。

「稲葉冥利が好きなのか!？」

「ふえ？」

「いやまてみなまで言うな。全部理解した。そうかそうなのか、これが噂に聞く百合というやつなのだな。まああれだ、世間の風当たりが強かろうと愛があれば大丈夫なはず」

「ちよ、ちよっとまってよ、それはないって」

「フレディーマーキュリーだってカート・コバーンだって、な。社会で認められるやつは大抵そうなのさ」

「ちがーう!!」

存外大きな声を出して、頬を仄かに紅潮させた日向は結城の勘違いを否定した。

「私はただ単に忠告をしたいだけだっ！」

結城は暴走に水をさされ妙に落ち着きを取り戻していた。淡々とチェーンを外し、発車できる位置まで自転車をバックさせるとサド

ルにまたがる。

「そんな忠告を俺にする理由はなんだ？」

ペダルに片足をかけ橙色の光をキラキラと反射させる日向の金髪を見下す。

「だからそれは秘密。とーもーかーく、稲葉冥利とこの先付き合っ
て行くならよく考えた方がいいからね。安易な気持ちで捨て猫に
餌あげちゃダメなのとおんなじ」

「際ですか。言われるまでもねえ」

いまだかつてない絡まれかたに辟易とし、別れの言葉を紡ぐこと
なく、車輪を勢いよく回転させた。

風に全身が包まれると同時に「じゃあねえー」と小気味よい挨拶
が背中に届く。無視するのも気が引けたので小さく片手をあげ、黄
昏時を駆け抜けた。

自宅に着いてから時間の矢は加速を始める。判を押したように
同じ日々の繰り返し、今日のようなハプニングが連発する分、学校
生活のほうで退屈を紛らわせるには適していた。

帰宅と同時に母親から風呂にはいるように言われ、上げれば夕食
の時間。食事を終えた19時から就寝前の23時まで、中学二年生
のフリータイムがスタートする。

とはいえ、やりあきたゲームソフトを起動する気にもなれず、結
城裕也はベッドに仰向けに寝っ転がった。

金太郎飴のような時間の概念。退屈紛れに勉強しようにも、なに
から手をつけていいのかわからなくて、ただ漫然とした焦燥感だけ
がふつつつと沸き立っているだけだった。

カバンから薄手の文庫本を取り出し、生あくびを噛み殺しながら
ページを開く。近所の古本屋で買った、一般書店では流通していな
い絶版本ではあるが、持て余した時間を潰すには有効な手段であ
った。

古本の独特匂いが鼻につき、ふと夕刻稲葉冥利と交わした会話の

一節が蘇る。

『世の中には発信者と受信者の二種類の人間がいる』
読者たる彼女は後者だという。

俺も同じだ。

ノートに綴った小説に意味はなく、それこそ黒歴史ノートを生産したに過ぎない。アイスピック男なんて出落ちもいいところだ。中学生特有の異常犯罪に対する純粋な興味から、映画のビザール殺人者を自分なりにアレンジを加え綴っただけだ。

誰にも読まれることなく、自身の記憶の淵に沈殿していく妄想。それを彼女が掬いあげた。

初めての自分以外の読者、本音を言うなら少し嬉しかった。

それでもやっぱり俺は書き手になんてなれない。よくて紛いものだ。

本物の文章が綴られた軽い重みの存在感に、彼の創作意欲は飲まれてしまった。

ゴロゴロと楽な姿勢で活字を目で追っていたら眠ってしまったらしい。

背中を請け負っているはずのしわくちゃシートは空気に変化し、ご丁寧に身体は制服が持つ軽い重みに包まれていた。一瞬にして、教室の真ん中に移動しているという違和感に襲われる。

「夢か」

自分が夢の中にいることに気がつくのは初めての経験だった。

意識を保ちながらみている夢を明晰夢という。脳が半覚醒状態のために起こると考えられ、自覚した時点で目覚めなければ、内容を自分でコントロールできると都市伝説的に語られている。

しかしながら、有るのは見慣れた現実的な光景であり、コントロールできたところでやれることはたかが知れていた。

景色はゴーグルなしで見た水中のように澱んでいて、廊下側の後ろの席に、誰かいるのがなんとなくわかった。

「誰だ？」

返事はない、この人物は言葉に耳を傾ける余裕がないと感覚的に理解した。言い表せられないモヤモヤが胸ぐらにつかみかかる。

そっちに行くな！神経の忠告を無視し消え入りそうなためき声にする霞がかつた廊下側の席に進もうとした時だ。

「あちゃー、まっさかー」

背後から明瞭とした聞き覚えのある少女の声がした。

振り向いて確認するまでもなくそこにいる人物が誰か結城はわかっていた。

「まさかヒマワリが夢にあらわれるなんてな」

素直な感想を告げると夢の中のオブジェクトであるはずの日向葵は眉間の皺をのばしてから、ニツと歯を見せて笑った。

「まあそういうこともあるさ」

金色に染められた短い髪をなでつけてから、椅子に腰をおろす。

「ユーユーも因果な性分だねえ」

半ば呆れるような独り言。首をひねる彼を、イタズラめいた表情でピストルの形で指差した。

「自我持ちでしょ？」

「意識はしっかりしてるけど……、つうかユーユーってなんだ？」

「結城裕也だからユーユー。んー我ながらハイセンスー」

少しもそうは思えなかったが突っ込みを入れても仕方がない。結城は決心を固めるように鼻息を荒くして、

「まあいいや、お前がなにを言いたいのかしらんが、面倒くさいから俺は寝る」

「まさに現在進行系で睡眠中だよー」

「夢をみるってことは浅い眠りってことだろ。だからさっさと深い眠りについて下らない浮き世のことを忘れたいんだ」

悲しい明晰夢のコントロールだった。

「んー、ちよつと認識が間違ってるかなー」

彼女は教壇に立ち、教師さながら黒板に文字を書き付けた。

チヨークがすり減るたびに妙にリアルな音が耳に響く。

「まず眠りには二種類あることをご存知かな？」

山や谷の循環が描かれた正弦波線がひかれ、

「さつきユーユーが言った浅い眠りってのがレム睡眠ね」

1つの山の頂点にレム睡眠と綴られている。

「レムは急速眼球運動、眼ん玉がぐりぐり動いてるよーっ意味。この浅い眠りの時に夢をみると考えられてきたけど近年じゃ違うみたい」

谷にはノンレム睡眠と文字を書いて彼女は振り向いた。

「深い眠りであるノンレムの時も人は夢を見てるんだってさ。人間はこのレムとノンレムを繰り返して寝てるってわけ」

左端に入眠時、右端には覚醒と書いてから、

「まずノンレム、そのあと1時間から2時間ほどでレム睡眠。交互にこれを繰り返してる。大体レムは90分ごとに30分ほどあらわれ、またノンレムに移行していくってわけ」

ねっから文系で人体の不思議に微塵も興味がない結城にはちんぷんかんぷんな話題に他ならなかった。

「ただレム睡眠時のすつきり爽やかな目覚めの時、夢を見たと思えてる場合が多いんだよ」

「いやなんつうものすごくどうでもいい。なんで夢の中まで授業を受けなくちゃいけないんだよ」

口をついたのは率直な感想だった。いちいち理論を突き詰めていては、きりが無い。深夜に呼吸のしかたや舌の位置が気にしては安穩な睡眠は迎えられないだろう。

「覚えおいて損はないよー。特にこれから稲葉冥利と付き合っていくならね」

「冥利？なんでまた？ほんとお前あいつにこだわるな。一体なんだってんだ」

「それはねえー」

にやりと歯を見せた日向が教壇から降りて、手についたチヨーク

をパンパンとはたきながら結城の目の前まで歩みよってくる。

「誰です？」

彼女が続きを口にする前に、別方向から声がした。振り返ってみると、ポニーテールの小柄な女の子が結城を遠くのものを観察するように目を細めて立っていた。

首を傾げながら、自らの夢にも関わらず見覚えがない、掃除用具入れにもたれかかる彼女に話かける。

「お前こそ誰だ」

「私が質問してるんです。誰ですかあなた」

「知らないやつが俺の夢にでてくん、帰れ」

「このバカは誰ですか、日向」

音もなく突然あらわれたちんちくりんな少女は結城を無視して日向の方を向いた。

「ユーユーだよー。一組の」

「現実の人間？それってイレギュラーじゃないですか。落ち着きすぎですよ。対策を講じなければ」

「慌てたって仕方ないよ。来ちゃったんだから」

「それは、そうですね。本当に自由人ですね。やれやれです」

仲よさげに話し合う夢の住人AとBに苛立ちを感じながら結城は怒鳴り声をあげた。

「もういいから消える。休ませてくれ」

二人はきよとんと彼に視線をやる。

「なんなんだお前ら。俺にそんな想像力ないはずだぞ」

「それは私のセリフでもあります。少し静かにしてください」

「わけわからん……」

見覚えのない黒髪の少女。

会ったこともない彼女は、自身も通う羽路中学の制服に身を包んでいた。ふと気になって自分の服装をしてみる。水色のシャツ、赤いネクタイ、ダークグレーのズボン。着慣れた制服だ。

周りを見渡してみれば、さきほどよりはつきりと景色が見れた。文字が書かれた黒板、等間隔に並ぶ机と椅子、黒ずんだ床。馴染みが出てきた二年一組の教室で違くない。

その教室の後ろの席にこれまた別の少女が机に伏せていた。

また新たな登場人物か、夢の中ならハーレムだなと惨めになりながら、話かけようと歩きだした彼に日向が頭を掻きながら声をかけた。

「それにしてもユーユー、なんで出てきちゃたんだい？」

首だけを彼女に向け「知るか」とぶつきらぼつに応える。それを意に閑さず日向は現れたドアを指差して言った。

「たぶんそこから出れば夢は終わるよ」

「いつの間にドアがあらわれた？」

「今日はこれくらいで。詳しいことは明日また話すよ」

「結構けだらけ猫はいだらけ」

冷たく言い放ち、言われた通りドアを開ける。

その刹那、彼は思いたす。あの幼い少女が伏せていた場所が、稲葉冥利の席で、はじめのすすり泣きはその辺りから聞こえた事を。

意識は、一瞬眩いばかりの白い光に包まれ、それからすぐ睡眠と
いう真つ暗闇にぼつぼつとゆつくり沈んで消えた。

実情と

目覚まし時計が耳障りなアラームで起床を促す。

カーテンの隙間からは穏やかな朝日が差し込み、室内は澄んだ空気に満たされていた。

眠気に支配された瞼をむりやりこじあげ、視界に訪れたのは見慣れた天井。

「朝か」

確認をとらなければ、世界が希薄なものに感じてしまうほど今朝の夢は生々しかった。グロテスクな表現やショッキングな出来事はなく、ただ教室に佇んでいるだけだったが、妙に現実的で、内容もはつきりと思いだせる。

「夢だー！」

とりあえず叫んで上体をはねあげた。

市立羽路中学校は在籍生徒数1300名と至って平凡な中学校である。大半が学区だからという理由でこの中学を選択したのだろう。校風こそ『責任を伴った自由』だが、結城裕也は閉塞感に似た苦しみを感じていた。結城のような『普通の生徒』は高すぎる自由度に足踏みしてしまい、なにもできないでいる。

眠気と戦いながらペダルをこぎ、初夏の爽やかな風と共に朝日を浴びて黄金色に輝く校門をくぐる。

そのままの足で二年一組の教室まで行き、日常のスタートラインに立とうとした結城は自分の席に我が物顔で鎮座している少女を見て頭を抱えた。

お喋りに花を咲かせているというわけではなく、口を結んで分厚いハードカバーに視線を落としている。

何事かと遠巻きで様子を伺うクラスメートたちの視線を無視し、自らの存在をアピールするようカバンを乱暴に机の上に置いた。

「そこは俺の席だ」

「おはよう結城。素晴らしい朝だね」

「挨拶は後だ。どけ。お前の席は向こうだろ」

「コアラの餌代は1日で2万4000円、一年で1000万円。人生ってなんなんだろう」

「藪から棒になんだ。さつさとスタンドアップ！」

真摯な訴えにしずしずと立ち上がった彼女と入れ代わるよう席につく。椅子に残った体温が朝から不快感を増長させる。

読んでいたハードカバーを小脇に抱えた稲葉冥利は神妙な面持ちで、カバンから勉強道具一式を机に移す結城にぼそりと語りかけた。

「想像力は知識よりも大事だ。ってアインシュタインが言ってた。想像力に限界はないって」

「それは愉快だな。学生の本分は勉強ですってアインシュタインさんに言つといて」

「あらゆるものには輝くダイヤが隠されている。ってエジソンが」

「電子回路がよくわかんないってエジソンさんに言つといて」

「とにかくこの世に生まれたからには、何かひとつ足跡を残したい、って野比のび太が、」

「さつきからお前はなんなんだ」

朝から要領の得ない嫌がらせに軽くイライラしながら顔を上げた結城の視界に、稲葉の持つている本のタイトルが飛びこんできた。

『人にやる気を出させる名言集』。

「お前意外と型からはいるタイプだな」

椅子の横に立つ稲葉は小首を傾げた。身長差は逆転し、いつもは見下す彼女に見下されながら彼はため息をつく。

「昨日の話か？」

「うん。返事を聞かせてほしい」

「きつちり断つたはずんだけど」

「一晩考えてほしいとお願いした。考えてくれた？」

「人の話をきかないな、お前は」

口で言いつつも、まっごうから拒否することが出来なかった。

二人でアイディアを出し合って、小説コンクールに応募する。それ自体は億劫な頼み事に他ならない。

心の出っ張りに引つかかるのは、昨日の帰宅時、四組の日向葵に言われた言葉の方だ。

忠告は『稲葉冥利とは関わるな』だったが、意味とは真逆な好奇心が彼を支配していた。

無聊の慰めに小説を綴り、そのついでに『稲葉冥利』と関わり合いをもつ。

「いいぜ」

気まぐれというより、怖いもの見たさ、結城がとつた選択肢がどんな結果をもたらすか、この時点では誰にもわからない。

「お前の暇つぶしに付き合ってるよ」

「ほ、ほんとっ？」

「ああ、ちょうど退屈してたところだしな」

声をワンオクターブ高くして彼女の瞳はきらめいた。

「私たちが組めばきっとすごいものができる」

「その自信はどっから来るんだよ」

不浄なものを寄せ付けけない純粹な光を帯びた瞳、それに見つめられて、彼はたまらなくなり目をそらした。

「言っておくが俺らはズブな素人なんだからな」

「風は私たちにふいている」

真剣な表情でよくわからないことをぼそりと呟き、稲葉は結城に背中を向けた。

「あ、おいどこに行くんだ？」

「本を返してくる」

どつやら図書室でわざわざ借りてきたらしい。

「放課後から打ち合わせを開始しよう。なんだかすごいものを生み出せそうな予感」

教室から姿を消した稲葉を見送りながら、結城はやっぱりこの女

はどこかおかしいな、と再認識した。

まあでも女子と接点を持つのは悪くない。

稲葉が姿を消すと同時に結城の机は、生き残りに群がるゾンビが如く男子の一団に取り囲まれた。彼らの表情はみな嫉妬と羨望に支配されている。

「どういふ事情だ？」「脅迫か？脅迫してんだろ？」「死ね！」

呪詛のような嘆きの声を、結城は「ふっ」と鼻で笑い飛ばし、

「どうやら俺のモテ期という名の獣が目を覚ましたよう……へびさつ！」

意味深な呟きに、無数の鉄拳制裁が加えられた。

「あのミスティアスな美少女稲葉冥利が無関心のどん詰まりこと結城裕也と仲良く会話するなんてっ！？」

男友達を取り乱しているのをみて、こっという役得もありだなあ、と結城は思った。

「まあお前にもいつか、な」

「くう、上から視線でバカにしゃがってえ！」

半泣きになる友達を無視し、結城は気分よく大口を開けて欠伸をする。涙で視界がにじむより早く、別の男友達に頭を叩かれた。

「つて、なにす んだよ」

「うるせえ、さっさと仕事しろ、今日日直だろ！」

「ああ、そっいえば。でも朝はやることないだろ」

授業に使った黒板を綺麗にしたり、移動教室の鍵を取ってきたりと、HRを待つまでの間に仕事はない。強いていえば日誌を記すことだが、それは時間が余った時でもできる。

「黒板汚れてんだろ。きれいにしろよ」

「朝の段階で汚れてるなら昨日のやつ の責任だろ。知らねーよ」

「減らず口たたくな。ほれ！」

「ただの嫌がらせじゃん」

ぶつくさ言いながらも立ち上がり、クリーナーの上に放置された

ままだった黒板消しを手にし全体を見渡す。

「別に汚れてなんて、……っ!？」

言葉を失って半歩後ずさった結城は、教壇から足を踏み外し尻餅をついた。

手に持ったままの黒板消しが床とぶつかり合い、白い粉塵が教室の空気に溶けていく。

痛みも忘れ唇を震わせる彼を、沸き起こった爆笑の渦が包みこんだ。

「すげー音！大丈夫かよー」

、天誅！」「ドジだなあー結城、しつかり」

彼らの声に半笑いで応えながらいそいそと立ち上がった彼はまっすぐ黒板に書かれた二つの言葉を見つめる。『レム睡眠』『ノンレム睡眠』、波線はなかったが、意識は混乱の渦に叩きつけられる。

耳の中で日向葵の忠告が響き渡った。

「物語を始めるにあたり」

人氣がなくなつた校舎、その日の単元がすべて終わり、教室は昨日と同じ静寂に包まれている。

二年一組に二人の生徒が残っていた。

稲葉冥利はキャスターのついた教師用オフィスチェアに腰を下ろし、机を挟んで自分の席に結城裕也はつく。お見合いのように向かいあつかたのだが、彼の精神は落ち着いていた。

「まず決めなきやいけないのはジャンルだ」

結城の言葉に、稲葉はふんふん頷きながらA5サイズのノートに『ジャンル』と書き付け、大きく丸で囲った。

「それなんだ？」

「ん？」

「いや、そのノート」

その問いかけにしたり顔で応じると、ノートをたてて表紙が彼に見えるようにした。ピンクの大学ノートのタイトル欄には『作戦ノート』と綴られている。

「意見を分かりやすくまとめるために用意した」

「ああ、そう。ヤル気満々だな」

「結城はどんなの書きたい？」

「俺はべつになんでも。まかせるよ」

「うーん」

稲葉冥利は顎にシャープペンシルのノック部分をあて、語尾を間延びさせた。その可愛いらしい所作に精神を揺るがされないよう平常心を保って、後頭部をぼりぼり掻きながら結城は質問した。

「その前に聞き忘れてたんだが、コンクールってのはどんな小説を対象としてるんだ？」

「え？」

「だから色々あるだろ。出版社の得意なジャンルとか、応募要項とか。それに合わせた話作りをしなくちゃ」

「た、対象作品？」

「そついや賞金とかってでんのか？締め切りはいつなんだ？文字数とか決められてんだろ？」

「あ、えつと、その」

「どうせ中学生にできることなんてたかがしれてるし、とりあえずは入選を目指そうぜ」

「う、うん。そうだ。ベストを尽くすに越したことはないけど、いまのうちに限界を知っておくのも大切」

「それで」

歯切れが悪くなった稲葉にクエスチョンマークを浮かべながら結城は尋ねる。

「コンクールの名前は？」

「うん、っと」

「もしかして忘れたのか？ならとりあえず出版社とか最低限わかること言ってみ。いま携帯で調べてみるから」

「そ、そういうわけじゃなくて。えーと、い、稲葉冥利賞ー、なんて」

「……」

「だ、だめ？はは」

「おい、お前」

彼の矢継ぎ早の質問に稲葉は目をしばたさせる。

「まさか、なにも決めてないのか？」

「うん」

その可愛らしい首肯に、結城は呆れてモノが言えない、というありがちなフレーズをリアルで体感しながら、殺意抑えこむよう額に手をあてた。

「怒るかもしれないから黙ってたけど、正直に言う」

捨て鉢になりかけた彼とは対照的に決意をきめたような語気で彼女は告げる。

「私は『特別』になれるならなんでもいい」

「どういう意味だ」

「連綿とした退屈な人生を終わらせたい」

まるでオペラでも演じるような手振りで彼女は立ち上がった。

「このままダラダラ生きてても予定調和なレールを走って、終りを迎えるだけ。死にたくないから生きてる得るものない人生」

直球な心情に結城は舌打ちが漏れそうになった。

今さらこいつは何を言い出したんだ。わかりきったことじゃないか、焼け野原時代ならまだしも今時の中学生は自分達のおかれた現状を冷静に判断し、褪めた将来設計を漠然的とはいえ終えている。それを嫌だと夢物語に浸るやつを口では応援してるよと言いつつせせら笑うのが俺らの年代のコミュニティーだ。

「手っ取り早く殺人でもしてる。少年法でそこまで深い罪にはなら

ないし、少女Aをメディアは楽しく分析してくれるぞ」

簡単に非日常が味わえるお手軽な提案だ。

「それも考えた」

思わぬ切り返しにゾクリと粟立つ。

引かせる為に言った冗談なのに、稲葉の瞳は本気だった。

「だけどせいせい2週間ワイドショーを騒がせて、よくある犯罪の一つに仲間入りするのが関の山。どんな残酷な手段を用いても一過性な行動じゃ着飾った特別はすぐに剥がれる。それに誰かを傷つけるのはセンスがない」

「お前は何になりたいんだよ。そんな特別とやらに憧れるならアイドルにでもなつたらどうだ？」

結構いいとこまで行けるだろうよ、とは言わなかったが、わりかし本気だった。

「幸福とはなにか。なにをして喜ぶのか。わからないまま終わる。

そんなのは嫌だ」

どこかで聞いたことのあるリズムミカルな発言だったが、あえて言及はしなかった。

「探して、考え、方法も手段も未だにでないけど、今こうして悩んでいる私自身の名前を、誰かに覚えていてほしい」

「つまりお前、俺に……」

「そうではなく」

男心を弄ぶな、と結城は思った。

「書籍としてカタチに残るのは目的としては合致する。全国あまねく人間に『生きていた証』をたらしめる」

「なんでお前の名前を売るのが俺が手を貸さないといけないんだ」
「嬉しかった」

「は？」

「私以外にも、『特別』を探している、『変化』を求めているヒトがいたことが」

「おいおい一緒にすんなよ。俺が書いてたのは本当に暇つぶしで」

「結城となら、私は変われると思った」

いきなりの恥ずかしいセリフに、次の弾として装填されていた文句が「んぐっ」と音をたてて喉の奥で暴発した。

「私とじゃ、ダメ？」

やっぱり稲葉冥利は、男心をくすぐるのがうまい。

ドライな性格とはよく言われるが、殊勝な彼女の声に、結城に残された選択肢は一つしかなかった。

「ま、やれるとこまで頑張ろうぜ」

四組のヒマワリの言っていたことが、少しだけわかった気がした。

交渉―哄笑

誰かと意見を出し合いながら創作活動をするのは初めてだし気恥ずかしいものがあつたが、その点にさえ目をつむれば実に有意義で楽しい時間だといえる。放課後女子と二人きりという、ある種あこがれなシチュエーションの真つ只中にいながら、心に起こるのはよこしまなものではなく、まっさらな画用紙に向かったときと同じ高揚感だつた。

「互いに好きなジャンルを言い合つてそれで決めよう」

とはいえ話は進まず、未だに外堀すら埋まつていない。

「そうだな。稲葉はどんなのが好きだ？」

「私は純愛モノが好き」

「……」

彼が触れたことのないジャンルだつた。稲葉の持つノートには短く『恋愛』とだけ記される。

「結城は？」

「俺はスプラッタ、ホラーかな」

「……」

彼女が触れたことのないジャンルだつた。

無言になりながらも律儀にノートには『ホラー』と綴られる。少女の生真面目さが感じられた。

どんなに話し合いが楽しくても、会議は進まなければ意味はなく、なにも成さずに終わるのは情けないにもほどかある。

段階ごとにまとめに入らなければ、完成させられるものもできるわけがない。そういう思いがあつてか言い出しつぺは、両手をぱんと叩き合わせ楽しげな音をたてた。

「それじゃ2つを混ぜて純愛ホラーにしよう」

「はあ？」

「臍物脳漿撒き散らされた荒野で芽生える恋、素敵」

「いや無理だろ。どうやったって無理だろ」

「だからこそ斬新。ハリウッドとかでピンチを切り抜けて結ばれる、吊り橋効果的現象」

「いいか、よく言われるが、『そのアイデアは誰も思いつかなかつたんじゃなく、思いついたけどやらなかった』んだ。意味わかる？」

「ん、なんとなく」

感性はバラバラで、意見が合致する方が珍しい。そんな状況で小説作りなんて遠い夢のように思えた。

「好きなものをぶつけ合うのは難しいね」

一息いれる穏やかな声で彼女は呟いた。

「そうだ！それなら、お互いこれだけは譲れない、絶対にいれてほしい要素をあげるのはどう？例えば男女の恋愛要素など」

「なるほどいい考えだ。俺は、そうだな。安っぽいと笑わないで欲しいんだが、異形、……フリークスなんかが欲しい」

「うん、アイスピック男のようなやつか。うんうん。なかなか興味深い」

腕を組んでこくこくと頷く稲葉冥利に「お前は？やっぱり恋愛要素か？」と尋ねる。

「私？私は」

少し頭をひねってから口を開いた。

「キス」

「きす？接吻？」

「うん」

「凄く簡単なキーワードだな」

「ストーリーの終わりに欲しい。完結を、フレンチキスという切ない思春期の終わりで飾る。胸に突き刺さる余韻が作れると思う」

「……まあそこらへんはおいおいな」

キラキラと夢見る少女の瞳に無数浮かんだ反対意見を述べるほど、彼は子供ではなかったが、胸に去来するのは一抹の不安、あ、これダメだ。何回か味わったことのある挫折感が胸をかすめる。このま

までは話合いで終わり、物作りまで入らない。将来振り返ってみたときのあのイタい歴史にしかならないし、一度やる、協力すると言った以上は最低ラインとして完成まではこぎつきたい。

さてどうしたものかと頭を悩ませていた結城の耳に唐突として明るい声が届いた。

「やつほー、一組の皆さん、こにやにやちはー」

教室のドアを開けて我が物顔で入ってきた女生徒に結城はもちろん稲葉も目を丸くする。

ふわりと揺れる金髪のショートボブ、昨日駐輪場で日向葵と名乗った少女だった。

「あなたのおはようからおやすみまでの暮らしを見つめる、二年四組の風雲児、ひつまわりでーす」

バチリとウインクをかまし、日向は適当な椅子を引いて、結城の机にくつつけるとそれに腰をおろした。

ぽかんとしていた稲葉がやがて冷淡な口調で口を開いた。「あなた誰？」

「むっふふ、私の名は日向葵、通称ヒマワリ。そこで呆けてるユーの唯一無二にして一番の親友。ただし恋愛感情はないから安心してね」

「ユーユー……」

稲葉はぼそりと呟いて下をうつむいた。選手交代とばかりに結城は四組の来訪者に声を荒げる。

「なにが親友だ、昨日会ったばかりじゃねえか」

「友情に、時間は関係ないんだぜ」

鼻につく言い方にイライラが加速する。

「昨日あれだけわけのわ」

「話は聞かせてもらったあっ！」

言葉は突如として大声を上げた日向に遮られた。

「協力するよ！冥利ちゃん、ユーユー！」

「は？」

日向以外の二人はきよとんと顔を見合わせる。

「小説を書くんでしょ？んーファンタスティック！頑張っちゃようー」

「お前その話誰から聞いた？」

「なんで私の名前知ってるの？」

「はっはっはっ、嫌だなユーユーが全部教えてくれたじゃないか」

「そっだ、っけ？」

「そうなの？」と責めるわけではない柔らかな眉尻で稲葉が顔を覗きこんできたが、昨日の会話を思い出すにそこまでの詳細は漏らしていない気がする。

「ねっ！？」

強調された念押しに、内心疑問に思いながら、「ああ」と曖昧な相槌をうつ。「と、いうわけで！よろしくーねっ」

「よろしくじゃねーよ、勝手に話を進めんな」

蛍光灯の光を浴びて輝く金髪、他を威圧する派手目な少女に辟易としている稲葉に代わって、精一杯に声を出す。

「お前が参加しなくても充分メンバーは足りてんだ。いらねえよ」

「あ、ひどい、心外だなあー」

ちつとも気にした風もなく彼女は続けた。

「いいことを教えてあげよー」

「知るか、帰れ」

「冥利ちゃんとユーユーが協力しあってアイデアを出す。当然二人は読書好きでしょう。これまで相当読んできたに違いありません」

再び二人はきよとんと顔を見合わせる、こいつはなにが言いたいんだ。

「だけど私は本を読んだことがありません！」

「だからなんだよ！むしろいらねえよ！つつかそれマジかよ」

カツコよく言い放たれた言葉はあまり誉められたものではなかった。

「活字拒否症っていうのかなあー、短いのかレポート類は大丈夫

「なんだけど長い繋がりのある文章読んできると頭が痒くなるんだよねー」
「体のいい名前つけてごまかしてるだけじゃねえか！ほんとの活字拒否症の人にとりあえず謝っとな」
「他のストーリーに引つ張られないからこそ、私の意見は必要になるんだと思うよ」

無視して続けられた彼女の一言は領けられる部分がある分、質が悪かった。たしかに文章を綴っていて、感銘を受けたストーリーに引つ張られそうになることはよくある。そういう点では彼の自作小説アイスピック男は完全にオリジナルとは言えない。

「わ、私もヒマワリさんの意見に賛成」

今まで黙っていた稲葉冥利がぼそりと呟くように声をあげた。

「多様な意見を取り入れるという点で仲間が必要だと思う」

「やったー。さすが冥利ちゃん、話わかつるー」

「ゆ、ユーユーはどう思う？」
「ただとどしく呼ばれたあだ名に、こいつ地味に気に入りがつたな、と思いつつ息をつき、」

「好きにすれば」

とヒマワリの参加を許可した。

「やつほーい、よろしくね、冥利ちゃん、ユーユー」

眩いばかりの笑顔を振りまいて日向葵は目を線にした。

夢の日向が選んだ『ユーユー』というあだ名を、現実世界の彼女まで同じ風に呼ぶとは、今朝の夢は予知夢だったのかと密かに思った。

「それで、それで。どんな話にするの？」

「まだ考え中。二人で相談してた」

早速友達と恋バナするような調子で尋ね、稲葉が平坦だがしつかりとした口調でそれに応える。

「どんな話にしようとかもないの？」

「うん。まだ。ヒマワリさんはどんなジャンルが好き？」

「ヒマワリでいいよ。あたしはねー、うーんコメディ映画が好きだよー、冥利ちゃんは？」

また新ジャンルかよ。

「私も冥利でいい。私は純愛モノが好きだけど……コメディってことはお笑い？」

「ザツツライ！嫌な気分がぶっ飛ぶのさー」

「うん。私も好き」

頷きながらノートに『コメディ』と書く。律儀なやつめ。

「でしょでしょ？というわけで私から提案がありまーす」

近くにいても関わらず教室中に響きわたるような大声で彼女は続けた。

「日常ギャグにしましょー」

その提案に「はあ？」と声が出てしまう。

「ほらサザエさんみたいなやつ。これなら小ネタ盛り込めばそこそこ読めるものになるし、なによりトレンディーだよ」

「サザエさん、トレンディーなの？」

首を傾げる稲葉に代わり、

「小説向けじゃないだろ」

独壇場になりそうだったので慌てて声を割り込ませる。

「起承転結がなくちゃとてもじゃないが『読ませる』文章にならないぞ。日常系は漫画やアニメだからできるんだ。畑が違う」

「いやいやユーユー。伏線とか考えない方が中学生には向いてるって。3人でギャグ考えればなかなかのものが出来るだろうし」

「反対だな。書いててつまんない。なにより今の俺たちの力量じゃ日常を上手く書けるとは到底思えない」

「そこらへんはほら、助け合いで華麗にカバー、ね！冥利」

突然話を降られた稲葉冥利は曖昧に「う、うん」と頷くだけだった。まだ日常ギャグの定義について考えているらしい。

「んじゃ訊くけど仮に『日常系ギャグ』で行くとして舞台はどうするんだ？東京都世田谷区か、静岡県清水市か？」

「学生の日常の方が描写しやすいよね。リアルタイムだし。となるとクラスか部活か委員会。年代は、高校がポピュラーかな」

「ありがちでやり尽くされてるわ」

「あたし達は経験してないぶん理想としての高校を描けると思うんだよ。例えば部活。羽路高校に変な部活があつて、うーん娯楽ら部みたいなの？その人たちの日常を面白おかしく描写して」

「どこに需要があるんだ、そんなもん。娯楽つてなんだよ、意味わからんわ」 息を吐いてから彼は続けた。

「俺は日常系には賛成できん。小説なんだから、文字でしかできないことをやるべきだろ」

きつぱりとした反対意見に日向は「むー」と唇を尖らせた。

「ミステリとかの叙述トリックを入れるってわけじゃない。小説なんだから『ありえねー』って展開が欲しいんだ。何が悲しくて学生が学生の日常を書かなくちゃならない、日記帳でやれ」

「なるほど。冥利はどう思う？」

日向は横目でちらりと稲葉の様子をうかがった。

「私もユーユーと同意見、かな。嫌いではないけど、やっぱりストリーで魅せたい」

「2対1じゃしょうがないねー」

そう言つと彼女はおどけるように机の上にくっきりと伏せた。

「そう悪いアイデアじゃない。私もヒマワリの意見で思いついたことがある」

「ふーい、なあに？」

なぐさめるような声に日向はちらりと腕の間から目線だけ覗かせた。

「ここまで来たら、ぜ、是非とも、部にしたい」

なにとつち狂つたこと言つてんだ、こいつ。

稲葉の突拍子のない発言に日向は目をまるくし、結城は「はあ？」と間抜けな声をあげていた。

「3人メンバーがいるなら、も、もう部活にしてもいいと思う」

ただたどしい口調は彼女の僅かな羞恥心の現れだろうか。

「それってリアルな話？」

「うん。私たちのこと」

「ユーユーと冥利とあたしの3人で部活を発足……」

おいおい勘弁してくれよ、と厄介事が苦手な結城が声を上げる前に、

「いいねえ、それ！」

日向は賛成の声を上げていた。

「うちの中学たしか文芸部は無いし、ぴったりだよ。部なら堂々と気兼ねなく行動できる上、集合場所にも困らないからね」

「認めるかーっ！」

とんとん拍子を防ぐため、結城は腹の底から声をだし、乗り気な二人の意見の間に割り込んだ。

「俺らの目的が文芸といえるか？よくて作文だろーが」

「べつに作文部でも私は一向に構わない」

稲葉にびっしやりと言いかえされて、言葉を失いそうになりながらも、部活申請における重要な要件を思い出し口を開いた。

「だ、だいたい設立には4人必要だし、こ、顧問の先生だって」

そんなのに所属してみる、人生の汚点だぞ、彼の精一杯の説得は続く。

「同好会なんてまっぴらごめんだからな」

さすがに人数の問題は簡単には解決できない。これでなんとかなつたと肩を落とし安堵した彼に悪魔の声が降りかかる。

「残り1人くらいあたしがなんとかするよ。あてならあるしね」

ヒマワリ、余計なことを。

「それほんと？是非お願いしたい」

「はいはい。まかせなさい。残る問題は顧問だけだけど、まあ、なんとかなるでしょー。作文部の設立は決まったも同然だね」

「……嬉しい」

ほんのり頬を桜色に染めた稲葉とは対称的に結城の顔は青に染ま

っていった。

断固拒否の姿勢をとったところで流れと彼女たちの熱意に押し切られるのが目に見えていたからだ。

「と、とりあえず今日はこれくらいにしないか」

「うーん、そうだね。もう遅いし」

時間をおいて頭を冷やしてもらおう、という思惑を含んだ提案だったが、日が暮れたという理由で許可され、今日は解散ということになった。

空想世界の Right-on

ガラス戸を押し開けた途端、夜の匂いを孕んだ初夏の風が結城の肌を優しく撫でた。青々とした樹木は傾きかけた日差しに照らされ色鮮やかに揺れている。

「それじゃ俺はチャリだから」

「うん。バイバイ」

エントランスで二人と別れ、駐輪場に向かおうと校門とは逆の方向に歩きだす。

「あ、あたしも自転車なんだ。それじゃね冥利」

「また明日」

やり取りが終わったと思ったら、軽快な足音とともに背中をバシッと叩かれた。

「まってよ、ユーユー」

振り向くと、無駄ににこやかな日向の顔がある。

「お前チャリ通か？」

確かに日向と昨日始めてあったのは駐輪場だが、自転車を停めている風には見えなかった。

「いやあはっは、細かいことはいいじゃない」

一笑に付す彼女にイラつきながら、結城はため息をついた。

「それでも今日は余計なことをしてくれたな。頼むから平穏な日常を引つ掻き回さないでくれ」

「まあまあ、作文部いいじゃない。それはそうとユーユー、見事に忠告を聞かなかったね。あたしちよっと感動しちゃったよ」

「あー、俺がなにしようが勝手だろうが」

「いやはや、ごもつともごもつとも」

彼女は軽やかなに足をあげ、歩みを進めている。

「これから先、冥利と付き合っていくつもりかな？」

「さあな。とりあえず区切りがつくまで、とは思っているが」

「それじゃあ、いくつか注意をば」

「またかよ」

駐輪場のトタン屋根が見えてきた。自転車に乗る前くらいなら聞いてやってもいいかと、首を動かして彼女の方を見つめる。日向は別れたばかりの稲葉をジッと見ていた。

「そんでお前、結局稲葉のなんなんだよ。保護者か？」

「ユーユーは冥利の事どう思ってるの？」

かけた言葉が無視され、小さくなっていく稲葉の背中から視線を外さず真剣な口調で尋ねられた。

やはり百合なのだろうか、とぼんやり考えながら結城は応えた。

「別にどうも。好きか嫌いかなら好きだけど、あの性格は難ありだよな」

「恋愛感情の有無を聞いてるんじゃないよ」

「はあ、やっぱりまた昨日の話をぶり返すんだな」

日向は無言で頷いた。

自転車の前に到着してはいたが、会話を区切ってまでサドルに跨る気は起きず、そのまま立ち止まって向かいあう。

初対面の気まずさはなく、すぐ打ち解けたように思える稲葉と日向の二人。もしかしたら昨日受けた忠告はそれこそ夢だったんじゃないかと考えていたのに。

「もつわかってると思うけど」

日向がゆっくりと口を開いた。

「稲葉冥利は他者を夢に引きずりこむ、協力的な催眠誘導能力の持ち主なの」

英語のリスニングのように穴から穴へ、言葉は鼓膜に意味を落とすことなく通り抜けた。陸上部の走り込みの掛け声だけが、妙に耳に残る。

「は？」

「本人には教えちゃダメだよ、それだけは、絶対に」

「催眠、誘導？」

理解が追い付かず、ぼかんと口を半開きに行っている彼に構わず言葉が続けた。

「睡眠時における他者の無防備な精神に干渉し、自らの支配下に置くのさ」

「お前それまじで言ってるの？」

無言になって首を縦に振る日向葵に、結城は思わず肩をすくめた。

「いい歳こいてバツカじゃねーの」

「むっ」

「んなもん稲葉に言ったら逆に俺がヤバいくらいに引かれるわ。頼まれたって言わねーよ」

「はにゃ」

間延びする謎の言語を喋る金髪少女に結城は鼻で笑いながら続けた。

「稲葉が超能力者だったら俺だって時速20キロで歩ける能力者だぜ。他者を夢に引きずりこむ？なんの意味があるんだよ、それ」

「あれ、信じてない？」

「与太話を手放して飲み込むほど、俺もガキじゃないから。フィクションと現実をこっちゃんにすんのはやめようぜ。な。痛々しいぜ、いろいろ」

ぴっしよりと言い放ち、カバンの内ポケットから自転車の鍵を取り出す。

「大人になれよ。来年受験生なんだから」

「……ユーユー今朝見た夢覚えてる？」

ピクリと、彼は鍵を右手に持ったまま動きを止めた。

「夢って」

冷や水をぶっかけられたかのような寒気が起こる。

他者を引きずりこむ……？

「まさか、だろ」

頬が引きつる。まるで実際に体験したことのように、今朝の夢なら記憶していた。右手から自転車の鍵が滑るようにアスファルトに落ちて、キンと高い音をたてた。

二年一組の教室で、日向や謎の女の子と会話する、当たり障りのない内容の夢。それゆえにうすら寒くなるような現実感があった。

こめかみから垂れた一筋の汗の玉を拭う彼に、日向は優しく諭すような口調で声をかけた。

「冥利の夢を介したから、昨日の夢はあたしが見てたものと同じになるはずなんだけどね、どう？」

答えはわかりきっている、彼女の言葉には勝ち誇ったようなリズムが含まれていた。嫌な予感が全身を包み込む。

真剣に聞いといた方がいいと赤色灯ともる彼の第六感がアナウンスを流す。

「い、稲葉が夢に他者を引きずりこめる超能力者って、さっき言ってたよな」

「超能力者とは言っていないよ、冥利が持っているのは不随意性催眠誘導能力。正確に言うなら能力ではなく病、名を冠するなら超眠り姫症候群ってところかな」

よくわからない単語の連発にくらくら目眩に似た症状が起こり始めていた。

「たしか、ナルトなんとかとかという超眠り病があったよな。それとは違うのか？」

「ナルコレプシー？あれとは違うよ。ナルコレプシーの場合は、感情のたかぶりなどが起因して、お化け屋敷で腰ぬけるのと同じように意識を失うんだけど、冥利の場合は、あたしたちの睡眠となんら変わったところはないからね。うーん、やっぱりユーユーの言うとおり超能力の色合いの方が濃いかな」

「他者を夢に引きずりこむ、って」

半分も理解できなかったが、寝言を言っているようには思えなかった。

「まだ詳しく解明されてないんだよねー。他者を巻き込む夢なんて前例がないし、やっぱり手っ取り早く『超能力』にカテゴライズして『超心理学』の分野に回した方がいいかもしれないね」

「わりいなに言ってるのかわかんねーや」

「そうだなー。これはあたしの持論なんだけど、冥利の場合、レム睡眠時に表れるPGO波とは別の脳波が、他者の感応性を高める働きが、距離や数を問わず発生していて」

認識出来ない情報はただ空気を震わせるだけで、結城の脳に届くことはなかった。

「もしくは、睡眠時でも機能している聴覚や嗅覚に何らかの影響を与えているのではないかとあたしは考えている。ただこれだと意図した夢を見せるのは可能かもしれないけど、オンライン的に内容を共有していることに説明がつけられないし、」

やっぱりなに言ってるのかわからない。

「だけど厄介なのはそこじゃない」

厄介なのはお前だよ、と言いかけて、口を嚙む。

「冥利の夢は現実に伝染するんだ」

「はあ？」

「リヒテンベルグの放電像として有名なキルリアンの写真なんかは蒸散する水分を捉えたもので生体エネルギーではないらしいんだけど、物質にはあたしたちじゃ計り知れない何かしらの力が存在していて、冥利の睡眠時念波は、これは多大な影響を与えるんだよ。…無理やり説明してるだけだからあまり気にしないでね」

現実に影響、という言い回しに、黒板に書かれた文字を思い出した。夢でヒマワリが綴ったものが、現実の世界でも存在していた。

「お、お前なに言ってるんだよ。稲葉が世界が滅びる夢を見たら現実もそうなるって言ってるのか？」

「そこまで大々的な影響は望めないけど、大げさな言い方をすればそうなるかな。少なくとも人間の脳を破壊するくらいの力はある、と予想される」

返答に結城裕也の平凡な脳みそは思考を放棄し、手っ取り早い解決策を導き出した。

「……あのさ、言い方悪いかもしれないけど、稲葉がそこまでヤバいやツだったら、殺した方が」

「主人公だったら絶対に言わないような発言だけでもっともだね」
少しだけ呆れながらも日向は寂しげな笑顔を浮かべて続けた。

「とはいえプラス面も考えたら、一概に悪いとは言えないんじゃないかな。例えば軍事面、非致命的兵器として考えれば電磁周波数兵器や音響装置より安全だし、医療現場に利用すれば麻酔より楽に精神を緩和させることができる」

日向の説明の仕方に結城は違和感を覚えた。彼女の言い草ではまるで新薬の効能を実験結果に基づいて説明しているみたいだ。

「だけでもまあ安心してよ。冥利の精神がフレない限り、よっぽどなことは起きないから」

「危険には変わりないんだろ？」

「ストップパーとしての役割があるからね。安心安全愛情ー」

「ストップパー？能力、いや症状を抑制する薬でもあるのか？」

「んーん。あたしたち」「は？」 神経を繋いだヒューズが飛びかかる。理解できない説明を受けるのは数回目だが、文章がつながってないのは確かだ。

「冥利の夢に侵入し、現実被害が及ばないようにコントロールする役割をあたしたちは担ってるわけ。多少実験的に小さな干渉を行ったりはするけどね」

「あたしたちって、……昨日の女もか」

夢に現れたポニーテールの少女を思い出す。

「彼女もそう。それにしても、まさかユーユーまで夢に来ると思わなかったよ。こんなこと始めてなんだよ」

「一体俺がなにをしたってんだ……。お前らがしっかりガードしてくれれば」

「あたし達はあくまで冥利の夢に干渉できるという能力を持つてる

ただだから」

カラスの鳴き声が未来を暗示するかのようには茜色の空に響きわたった。

「超眠り姫症候群はあくまで実験的段階をでないし、危険といえばそうなんだけど安全に気を配り最大限の効果を発揮できるよう調整を」

「おかしいだろ」

「え？」

「あ、いやなんでもない」

喉まででかかった言葉を飲み込んで、彼はギュツと握り拳を作った。

そんな彼を慰めるように日向が口を開く。

「……おそらくユーユーは一定の区切りがつくまで冥利の夢にとらわれ続けると思う」

「区切りってなんだよ」

「さあそれはわからないけど、単純な例で言えば、彼女に飽きられることかな」

無理やりおどけるように歯を見せた彼女の笑みはぎこちなく動く歯車のようにだった。

「手っ取り早く無関心の対象になればいいんだな」

「あれ？嫌なの？頼りにされてる印なのに」

「ほざくな。どうすりゃ後腐れなく稲葉と縁が切れると思う？」

「うわあ、君って最低だねー」

「お前らに言われたくないな」

先ほどから感じていたイラつきが、眉間にシワとなって現れる。

「……どういう意味？」

落ち行く夕日に照らされた日向葵は、その光に溶けるような弱々しい声音でそう尋ねた。

「おかしいだろ。まるで稲葉の管理者みたいな言い方」

ぼそりと、だが密度の濃い息と一緒にその言葉を突き刺す。

「稲葉はてめえらのモルモットか？反吐がでる」

「モルモット、まさしくそうだね」

普段の明るく剽軽な彼女のイメージとは裏腹に、日向はうつむいて、小さく呟いた。

「彼女は研究目的として今まで縛られて生きてきた」

「嘘臭い話だな」

受験にそなえ多角的に物事を判断するように自分自身心がけている。少なくとも稲葉冥利との投合は気まぐれに他ならない。

「妄想だとカミングアウトしろよ。じゃなきゃ幻滅だぞ」

「残念ながら、それはないってユーユーもわかってるでしょ？」

「まあ、實際目の当たりにすれば否応なしに」

結城は一転明るい口調となるたけ日向を責めないよう、優しく言った。女子を泣かせていいことなどない。

「お前らはお前らで大変なんだろ。てきとーに力ぬいて頑張れ」

「勘違いしないでほしいんだけど、これはあたしの考えじゃなく、あくまで研究庇護対象だった冥利の取説みたいなもんだからね。あたしは職員じゃないし」

「研究ってそんなたまじゃないだろ、あいつは」

「そう、その点は安心して！彼女今は自由の身なのさ！」

「なら良いよ」

かがみこんで鍵をとり、自転車のチェーンを外してハンドルを握る。

「それじゃ俺は帰る」

「ちよつと待って、まだ説明は終わってないよ」

「稲葉冥利の夢はすごい。……他になにがのこってるんだよ」

「セーフティーとしてのあたしたちの役割とか、冥利の研究対象離脱のプロセスとか」

「明日話をきくから、今日はいい。少し整理したい」

「あ、そう。んじゃまた」

「ああ、またな」

サドルにまたがってペダル漕げば、直ぐに日向との会話は過去になる。

感じた漠然とした怒りに、わだかまりを感じていた。ただの憐憫でも同情でもない、稲葉が好きなのわけでもないのに、この胸のムカつきはなんなのだろう。

黙って話を聞いていれば、悪いのは日向じゃないとわかっけても耐えられなくなって、出どころ不明の怒りの矛先を彼女に向けてしまうところだった。

殴ることが許されるなら躊躇なく拳をふるっていたところだろう。

故障中

眠らなければいいんじゃない。

単純な回答だが、その有効性は確かなものといえる。

そうだよ、いくら稲葉が変な力を持つていようと所詮夢の中だけの話、意識を保ってさえいれば関係ない。

明日がづらいが身を守るためには致し方ないと夜更かしを決め込んだ結城は、さっそくゲームソフトを起動した。

指にタコができるまでやりこんだ格闘ゲームだ。対PC相手というのが寂しいところだが、続けてプレイしていくうちに敵も学習して手ごわくなっていく。

夢中になってボタンを連打しているうちに夜が更けた。

「桃ちゃんいいでしょー」

「ヒマワリは勝手すぎます。なんで私がそんな存在意義の薄いクラブに入らなければいけないんですか」

「帰宅部よりは内申点プラスされるよー。桃ちゃん推薦狙いしよ」

「どうしてそれを。な、なんにせよ拒否します」

おいちよつとまで。

ほっぺたをつねってみても、痛覚が麻痺しているみたいで痛いのか痛くないのかよくわからなかった。

「お、ユーユー。ちいーす」

にこやかに片手を上げる日向葵。

「また来たんですか。やれやれです」

桃ちゃんと呼ばれていた少女は軽く肩をすくめて、パイプ椅子に腰を下ろした。

「……なんでやん」

あまりの不可解さに、結城は流暢な関西弁で頭を抱える。

ヨガファイヤを放っていたのに、気づいたら机と椅子が並ぶ簡素な空間にヨガテレポートしていたのだ。その驚愕は言葉では表せら

れない。

「どうやら冥利、クラブ活動にすっごい興味津々みたいだねえ」

日向はオーバーに腕を広げて、自分たちのいる空間を示した。机と椅子とが並ぶ六畳ほどの簡素な空間だった。友達の話でイメージする部室のようなところに、結城達は立っている。

「これが噂の稲葉の絶対領域か……」

自らの心象を知りもしない単語でごまかそうとするがうまくいかなかった。

「くそっ、いつのまに寝ちまったんだ。あんなにMAXコーヒーを飲んだのに」

「無理無理。冥利の睡眠時発せられる特殊な念波はターゲットを確実に捉えるからね。車の運転とかは気をつけた方がいいよ」

「今すぐ覚める！ 鳴り響け目覚まし！」

「焦らなくても直ぐ覚めるよ。落ち着いてユーユー」

静かな口調で慰める日向の声はたしかに彼の鼓膜を震わせていて、とても夢だとは思えなかった。

「無事に帰還できるという保証は？」

「大丈夫だって。ストーリー性のない類はすぐに終わるのがルールだからね」

日向は人差し指をピンと立てて続けた。

「そもそも夢ってのはね、ユーユー。記憶の整理整頓なのさ。脳が得た膨大な情報を短期記憶から長期記憶に移し替えようとしているわけ。つまり海馬や大脳皮質に治められている記憶をフラッシュバックさせ記憶を繋ぎあわせる働きを持つてるの。もちろん強くイメージしたことも記憶として夢に視ることはあるから注意してね。例えばさうだな悪魔のトリルなんかが有名かな」

「またお勉強の時間かよ。お前バカそうなのに結構難しい言葉を使うよな。見た目に反して実は頭いいだろ」

「いやあ、それほどでも」

頭をぼりぼりと書く日向に結城は貶してから誉めたのに、と軽く

息をはいた。

「話をちゃんと聞いたほうがいいですよ、結城さん」

涼しい顔で頬杖ついていた少女が結城に話かけてきた。

「む、桃ちゃんか」

「気安くよばないでください。なにをもってそんなふざけた呼称を用いるんですか」

ポニーテールの少女は柳眉を逆立てて声を荒げた。

「だって俺あんたの名前しらねーし。んじやなんて呼んだらいいんだよ」

「呼ばなくていいです。私も結城さんのことは『あなた』としか呼びませんから」

「コミュニケーションを取る気ねえーな」

妙に可笑しくなって自嘲ぎみに鼻を鳴らした彼の肩にぽんと日向は軽く手を置いた。

「とまあ、夢の役割から冥利の場合を分析したいんだけど」

こいつはまったくブレないな。

「この記憶の整理整頓は時間にしたらほんとに一瞬で、しかも一つが短いんだ。そうなる疑問が一つ出てくるよね」

「なにが？」

ソクラテスメソッドに置ける双方向性が、ぼんやり聞いているだけではまったくいかされなかった。

「ストーリー性のある夢だよ。時間の流れを感じられるでしょ？」

「現在進行系だぜ」

「そう。実はこれ脳が時間性があるものとして処理してるんだ。夢は同時に複数の情報を記憶整理の過程で流すの。現実世界ではあり得ない状況をわかりやすくするための処置といわれてるけどね。実際には刹那に近い時間なんだ」

「ふーん」

「んでストーリーについてはかんたん。例えばユーユー。檻、猿、バナナっていう文字を連続で見たら、檻に入ってる猿がバナナを食

べてんだなーってイメージが沸くでしょ？つまりストーリー性のあ
る夢ってのはそういうことなんだよ」

「おう、まったく何言っているかわからないぜ」

「つまりは速読術を脳が行ってるわけさ。文章ではなく映像なら一
瞬で理解できるでしょ？」

話を聞いてなかった結城はどういうだと心の中で突っ込みを入れ
た。

「冥利の夢も、単なる情報とストーリー性があるものに分かれて
るの。冥利の場合、夢ではなく仮想空間を作りだしてるんじゃない
かっていう説もあるけどね」

肩をすくめてから続けた。

「ストーリー性があるものに関しては区切りがつくまで終わらない
から面倒なだけだ」

「それはやつかいだな。見てればいいのか？」

「だと楽でいいけどね」

溜め息混じりに日向は桃と目を合わせた。

「私たちが参加することが前提で話作られてる場合がほとんどでさ。
まあ無理やり割り込んでるからってのも原因の一つだろうけど」

「それじゃどうすんだよ」

「まあ破綻しない程度に」

「演じる、と？」

「簡単に言つとそうだね」

白い机に、3つ並んだパイプ椅子。現実的な光景に稲葉冥利の恐
ろしさに、いつそ笑いがこみ上げてきた。

「まじかよ。そりゃごくろうさんだな」

「まあこれが夕方言い損ねたセーフティの役割なのさ。現実には影
響がでないよう綻びの調整っていうね」

「ぶぶ、じゃ、なに？稲葉がメルヘンな夢みたらお前ら妖精になっ
て空とんじьяんの？」

「夢の中じゃなんでもござれ、だよユーユー」

稲葉が男子中学生じゃなくてよかったな、と結城は思ったがセクハラ発言になるので黙っておいた。

「まあいいや。なにせよ俺には関係ない話だ。寝る」

パイプ椅子を引いて机にふせようとす。触感が手のひらを伝わり、改めて現実世界と遜色がないことを再認識した。

「他人事ではないのです。結城裕也」

ちらりと顔を上げると、向かいに座る桃と目があった。すっきりとまとまった小顔は、どことなく稲葉冥利に似ている気がした。

「桃ちゃん俺に話かけた？」

「だから、ちゃん付けで呼ばないでください」

「んーじゃー桃？」

「気持ち悪い！」

面と向かってそんなこと言われたのは初めてだった。ましてや相手は女の子だ。

「だから、代名詞で。……脱線しました。あなたも私たちのこと笑える状況ではないこと、おわかりですよね？」

「……」

薄々感づいてはいたが認めたくなかった。

「あなたは夢にとらわれてるんですよ」

「うん、そうか、なるほど」

こくこくと頷いてから、

「助けてください！」

おでこをガツンと机につけて彼は頭を下げた。

「と、突然なんなんですか？」

「結城裕也の人生に非日常はまっぴらごめんなんです！なにとぞ脱出方法を！平に平に！」

「し、知りませんよそんなの。自分の意思に反して冥利さんの夢に干渉する人なんて初めての事例なんですから」

「ち、つかえねーな桃ちゃん」

「もういいです。好きに呼んでください」

注意するのに疲れたらしい桃は、小さく息をはいた。

「ん、ちよつとまで。お前らは自分から稲葉の夢に干渉してるの
よ」

問われた彼女はちらり日向の方に視線をやり、そのアイコンタクトで代わりに日向が口を開いた。

「あたしたちは8年前にそーゆー超能力を手にいれたのさ。夢に入りこめる能力をね。んで、この力を使って調査してるわけ」

「うひよ超能力。ついにきたか」

いままでも十分突き抜けた展開なのにいまの彼女の発言は、結城のテンションを妙なところで上昇させた。

「そこらへんはおいといてだよ。一つ忠告をさせてもらっけどね」

「またか。それ好きだな」

「ユーユー、夢の中での突飛な行動は慎んでね」

「どついう意味だ？」

「今日みたいな端的な時はいいけど、ストーリー性がある夢のとき流れに反した行動をとったりしたら」

突然視界がぐらりと揺らいた。

世界の変貌に「あつ」と声をあげる。壁や天井が、ぶつぶつと虫食いが発生するように部分部分消滅していく。

「最悪世界が滅びるから」

「はああ？」

それが夢の終わりだと気付くのに時間はかからなかった。

【君島は普通の男の子だけど私にとっては特別な異性で、都心部に出ると聞いた時、私の胸にはぼっかりと丸い穴があった。

排気ガスで黒ずんだ未来はくすぶっていて、ただ漠然とした焦燥感だけがその時の懸案事項だった。

なにもかもかなぐり捨てた価値観に「さよなら青春」と、桜の蕾に問いかけるくらいの声量で呟くと、彼は「そんな言葉で過去にすんなよ」と照れ笑いを浮かべそつと私の手を握った。

しっとりとした手ひらだったが不快感はなく、不思議と心が温かくなるような体温だった。」

「どう？」

「どうって……」

最近みるようになったシリーズもの変わった夢（そう思うことにした）に頭がいつぱいの結城を、ボタンのように丸い稲葉冥利の瞳が見つめていた。

放課後また呼び出され、手渡されたのは砂糖菓子のように甘い小説の冒頭、彼女が好きだと言っていた『純愛もの』のはじめの部分だった。

手書き、ということとはオリジナルなのだろう、なるだけ当たり障りのない言葉を選びながら批評を開始した。

「なんかくどくないか？文章が」

「そうかな。例えばどこが」

「俺の個人的見解だが、比喻表現が全体的に」

「そう」

しょんぼりと肩を落とす稲葉を励ますように結城は声をあげた。

「でも俺が恋愛小説読まないだけだからな。純愛は好みじゃないんだ」

「それなら仕方ない。それはそうと今日こそはジャンルを決めよう」

「ああそうだな」

一組の教室にいるのは結城と稲葉の二人だけで、日向は「さきやつてて」と最初に顔出ししたただどこかに行ってしまった。自分から参加を表明したくせに無責任な、と思ったが、稲葉の前じゃどつちみち夢のことを確認できないのだから変わりはないか、と少年は小さく一人ごちた。

日向といえば昼休み、友人の一人が「ヒマワリさんとどういう関係だこら」と頭を小突いてきた。なんでも昨日駐輪場で立ち話をしていたところを陸上部に目撃されていたらしい。

「ふっ、どうやら第二のモテ期という名の獣が目を覚ましたらしい

な」と適当なごまかしをすると、割と強めに首を絞められた。

「ご意見ご感想、続きを読みたいという方をお待ちしています」

「お前はなにをやってるんだ稲葉」

「こつこつ時テレビだと下に郵便番号が表示されてるはず」

自身の鎖骨あたりから地面を指さして、それを左右にふるといふ妙な行動をとる稲葉を白い目で見ながら結城は静かにノートを広げた。

「おもしろくない冗談だ」

「そう。残念。薄々気づいていた」

ならやるなよ。と二人で溜め息をつくと同時に教室のドアがガラリと開かれ、日向が明るい声をあげ入ってきた。

「やつほーご機嫌いかか！」

「上々」

「単語じゃ嘘くさいよー」

やって来た鬱陶しい台風は、意味もなくくるくる回転しながら、また適当な椅子を二脚つかむと、結城の席に歩みを進めた。

「……二脚？」

「紹介します。期待のニューカマー」

彼がクエスチョンマークを浮かべると、ポニーテールの少女が一組の教室に入ってくるのはほぼ同時だった。

「桃ちゃんです」

「……どうも」

そこに立っていたのは夢でみた少女だった。

狼煙をあげて

存在意義を見いだせない、というか存在すらしていない作文部（仮）に新たな入部希望者がやってきた。

「二年四組、桃と申します。ピノとカントリーマームが大好きで、これらは神の創りし食べ物だと考えています」

ふざけた自己紹介に、彼女にはやる気がないのだと、頭の片隅で理解した。白い肌に黒い瞳、まるつきり温室育ちといったような少女だったが、髪型は活発さをアピールするように後ろでまとめられ、小さな輪郭を強調している。

会ったことはない。ただし見覚えはある。

初対面で「夢で会ったことがある」なんて歯が浮くようなセリフを吐けば、自分自身のアイデンティティの崩壊を招くと判断した結城はひとまず口を閉ざすことにした。

入室事から露骨に不機嫌さをアピールしている桃の横で、ヒマワリが片頬を吊り上げニヤニヤしている。無理やり連れてこられたのだらうと結城は推測した。

「私は稲葉冥利、その男子は結城裕也ことユーユー。よろしく、桃ちゃん」

自身の不本意なあだ名が呼ばれると同時に会釈する。

「私は頼まれて名前を貸すだけです。幽霊部員と思ってください」

「大丈夫。作文部はきつと楽しい」

「ですから参加はしません。申請の数合わせです」

「桃ちゃんも夢中になること請け合い。作文部の活動は充実しきっています」

「いえ、私は参加しないので関係がな」

「いつしよに頑張っつていこう」

「……」

稲葉の押しの強さは折り紙付きだ、と結城は密かに同情し、

「切磋琢磨して良い作品を作っていこうぜ、桃ちゃん」
親指をたてると、もの凄い形相で睨まれた。

「やってけそうだね」

「どこをどう見てたらそう思えるんですか」

「まあまあ桃ちゃんも仲間になったことだし、ここは本格的に活動目的、目標を決めましょうよ」

場をしきりだしたヒマワリに、面倒くさいから全部まかせたと丸投げすることにした。

「目的は小説作りだよね」

「作文の間違いだ」

「目標は入選、賞金、印税、タックスハイブン、リゾート、ハワイアーンだよね！」

「とんでもないところに行きついたなっ！」

「おおよ、ユーユーは違うのかい」

「てめえと同じ意見のヤツがいるか！」

桃が小さく手をあげた。

「お前は面倒くさいだけだろ！」

「初対面なのにずけずけおっしやいますね」

「な、あ、まあ、ううん……」

実際彼女の言うとおりなのだがいまいち腑に落ちず、言葉を濁した結城に、

「だからと言ってどうこう言うつもりはありませんが」と桃は冷ややかに彼を見た。

「まあまあ、それじゃユーユーはどんな活動目的があるのさ」

場を和ませる声音のヒマワリに結城は小さく息を吐いた。部を設立する気にはなれない彼にとって、二人は邪魔な人物に他ならない。正直言うなら稲葉冥利とも手を切りたいところなのだ。

「あわよくば入選、賞金、あわよくば印税だな」

「あわよくば、をつけただけで私とそんなに大差ないじゃん！」

「お前らには節操がないんだよ。俺は自分らの実力を鑑みた上で、おこがましい発言はしないの」

「小さい小さい。夢は大きくビッグマウスで」

こくこくと頷く日向の横で、桃が退屈そうに欠伸をしていた。殴りたくなつた。

「ユーユーはだめだねえ。冥利は？」

「日本全国あまねく国民に私の存在を知らしめる」

「……NHKみたいだね」

ジャギ様の間違いだろ。

「とにもかくにも、小説作りでありまーす！」

「その通り」

「そして賞への応募！目指せ入選、印税！頑張りましょー」

「おおー」

高気圧と低気圧の激突はプラスの方向に科学変化したらしい。とんとん拍子に進む部活動に、呆れを伴った目眩を覚える。もうなにを言おうと無駄なのだ、彼女たちを止めることはできない。

「完成作品はどこに送るんです？」

「え」

物事の行く末を見守ることにした彼にとって、桃の発言は天使のラッパのように聞こえた。

「そりゃ、出版社だよ」

桃と目を合わせず視線を宙に漂わせてヒマワリは至極当然のことのように呟く。

「どこの出版社ですか？例えば」

「でっかいとこ」

「なんとという賞に応募する気なんですか？直木賞、芥川賞、ノーベル文学賞？」

語尾に思いきりバカにしたかっこ笑が付帯されている。

「ははっ、日向葵賞、なんてーだめかな？はは」

「尊敬すら覚えます。あんまり間抜けな発言しないでください、同

じ四組として恥ずかしい」

昨日似たようなことを言っていた稲葉が、密かに顔を赤くして俯いた。

それを横目で見て、結城は小さくガツポーズをとる。暴走列車たる日向を足止めし、湯だった頭に水をぶっかける桃の発言は、救世主の一言のように神々しく感じられた。

彼女ならふざけた部活をつぶしてくれるかもしれない。

「それで部活を発足しようなんてよく言えますね」

「桃ちゃん、急いては事を仕損じる、という言葉を知ってるかい？」

「先んずれば人を制すとも言います。作文部に必要なな情報、準備、行動です」

「うーん、そうねー」

「調べときました」

どん、と机の上にA4サイズのプリントの束が置かれた。

「純文学、大衆小説、ライトノベル。小説の賞のジャンルは多岐にわたります。数ある中から厳選し、さらに新人賞があるものを選びました。応募要項なども記載されてますから目を通してください」

「やる気満々かよ！」

涼しい顔で凄まじい活躍ぶりをみせる新入部員に、結城はたまらず声を荒げた。潰す側かと思ったら、その実部の一番の功労者だったのだ、裏切られた心情だ。

「すげえ、さすが桃ちゃん。私たちにできないことをー以下略！」

「ありがとう。どれにしよう」

日向と稲葉の二人はプリントの束に餌を求める鯉のように群がる。その様子を眺めながら桃は一枚を取り上げ、パンと音をたてて叩いた。

「締め切りが3ヶ月以内で最も入選しやすいと思われるのがコレです」

A4サイズの藁半紙に印刷された文章を日向がたどたどしく読みあげる。

「青春小説、大賞？」

小説のジャンルを細分化した時、物語の主人公、それを取り巻く登場人物が若年者でありモラトリアムを通じた体験が綴られているものを青春小説という。

「このジャンルなら若者の心情をよりリアルに決るように記せます。描写すべき人物は同年代ですしなにより物語が破綻しにくい」

「おおー。なんだか行けそうな気がしてきたよ」

日向のやる気に満ち溢れた発言に、

「私は最初から出来ると思っていた」

と稲葉がよくわからない対抗心を燃やしたところで、沈黙を決め込んでいた結城は、声をあげた。

「青春してない俺にはそんなもん書けん」

悲しい発言だった。

「美少女三人に囲まれて、青春してないなんてどの口が言うのさー」

「お前は青春してると言えるのか？青春ってなんだ？」

突然の夕陽に語りかけるような質問に、日向は口を半開きにして固まる。

「確かに充実した日々を送るのが青春だとしたら、私の日常は灰色にまみれた無味乾燥なものかもしれない」

結城の悲しい発言に、さらに落ち込むような声音で稲葉が静かに同調する。

「だけどこれから作りあげる作文部の日常はまさしく青春と称するに相違ないものになると思う」

「それは違いますよ。稲葉さん。ユーユーさん」

あだ名がすでに固定されてしまったこと結城は静かに理解した。

「青春とは、還暦である60までを方位を表す青龍白虎朱雀玄武の四神で割り、春夏秋冬の四季を加えたもの。若い時が青春、そこから朱夏、白秋を経て玄冬。若い時代を表す単語が「青春」なんです」
そこで「つまり」と一息ついてから、

「若ければ青春なんです」
身も蓋もねえ。

「さて、賞の募集要項は『青春小説』であること」
桃はプリントの束の一番上にくるよう手にもったそれをそつと置き、

「これで一つやってみませんか？」
くりくりした瞳を他のメンバーに向けた。

「手拱いていた小説のジャンルはこれで決ー定、私は異論なし」
ヒマワリが大きく手をあげ、賛同する。

「俺も別に」
作文部の活動としては反対である結城だが、やってみたいという気持ちの方が単純に勝っていた。

「私も」

稲葉は短いが確かな言葉で、はっきりと告げる。

「それでやってみたい」

稲葉のノートにはでっかく『青春』と書かれ、下に可愛らしく『決定！』と綴られた。

はじめの自己紹介で名を貸すだけで活動はしないと明言していたはずの桃だが、いつしか率先して部をまとめあげる妙な展開になっていた。

稲葉冥利が構築している作文部の雰囲気は、やる気を引き出す力があるのかも、と結城はなんとなくそう思った。

「ジャンルが決まったところで次は話作り、です」
机に広げられたノートをとんとんとペンで叩きながら桃が呟いた。
「皆さんの遺憾なき意見を、」

「仄かな恋愛描写は入れたい」

「クスリと笑えるコメディ要素は欲しいよね」

「緊迫感を高めるホラーは不可欠だろ」

てんでばらばらな意見に、いつの間にか司会進行役になっていた

少女は閉口した。

「笑える部分がなくちゃ物語がダレるよ」

「ばっか、お前そんなんじゃ締まらねーだろ。読み手をドキドキさせなくちゃな」

「ユーユーもヒマワリも青春小説ということ忘れてる。切なさ描写しなければ、青い春とはいえない」

「それもあるかもしれないけどさあ、やっぱり青春っていったら下らないことやって笑い転げる、コレでしょ」

「多感な時期のモヤモヤとした感情だな、丁寧に残酷に描写して、」
「ストツープっ！」

ガヤガヤと騒々しい相談風景にたまらず声をあげた桃は、机を大きく叩いてから立ち上がった。

他のメンバーは鳩に豆鉄砲といった様子でそれをみる。

「物語には起承転結という順序があります」

「へっバカにすんじゃねー桃ちゃん、そんならい知ってるぜい、小論文の書き方で習ったもんね」。序論本論結論……あれ？」

ヒマワリの茶々を無視して桃は話を続けた。

「起で、承で、転で、それぞれの挙げたテーマを意識して話作りをしてみているかがでしょう。あくまで青春小説という枠組みを外さずに4つのルールを守って」

「そんなうまくできるかよ」

「上手く行くよう調節するのが作者の実力なんじゃないですか。しつくり来るプロットをみんなで考えましょう」「そうだなー」

良いアイデアを出そうと三人が首をひねり始めたのを見て、桃は人心地がついたように腰を下ろした。

唸りながら考え続け、数分経ってから日向がいの一番に挙手する。

「はい、考えつきました！」

「どうぞ」

メモできるようペンを構えた桃に促され、日向は元気溘刺に声をあげる。

「お笑い芸人を目指していた主人公がヒロインと恋に落ちて、彼女のストーリーカーに殺されかけるけど、なんやかやで結ばれる！」

「……」

「どう？」

「ヒマワリは少し悴に捕らわれすぎな気がします」

「却下かー」

残念そうに机に沈んだ彼女に変わって、

「はい」

稲葉が手をあげた。

「友達とふざけあいっこしてたら、空から女の子が降ってきて、ゾンビとバトルしながら、世界崩壊を免れる」

「脈絡がなさすぎます」

「……そう」

稲葉はかすかに肩を落とした。

「ユーユーさんは？」

「ん」

「なにかありますか？」

桃に突然降られ、なにも考えつかなかったとは言えず、

「線路脇の森林に死体があると噂で聞いた少年……少女たちが、だな、陽炎にばやける線路沿いをふざけあいながら、歩くわけ、だ」とりあえず、ぱっと思いつきで、嘯いてみる。

「……」

「敵役にジャックバウアーなんかを配置して」

スタンドバイミー丸パクリの原案に、一同は皆口を閉ざした。

「いや、冗談、」

「いいねえー！」

「は？」

ネタばらしを続けようと声をあげた彼より先に日向が賞賛の声をあげた。

「ユーユーいいよ、それ！なんていうか、ノストラダムスな感じが

して」

「ノスタルジック」

「そうそれ郷愁的というか」

「たしかに死体を探しに行くという暗い設定と裏腹な切なさを彷彿とさせる題材です」

手放して誉める桃に結城は慌ててこの設定はパクリだと声をあげた。

夜明け前

非公式なクラブの為、見回りに来た教師に退室を命じられ、唇を尖らせながら一同は帰路につくことになった。

「明日申請しよう」

「そうだね。いちいち先生に邪魔されてちゃ話が前に進まないよ」
ぶつ垂れる日向と稲が仲良く廊下を先行して歩き、その少し後ろに結城と桃が続く。後列に会話なく、黙々と足を前に出すだけだ。

柿色が落ちる階段前についた時、シャツを桃に軽く摘まれた。

「なに？」と顔を彼女に向けて聞いてみたが、質問を無視し彼女は階段をくだる前列の二人を「すみません」と呼びつけた。

「ん？」

「私とユーユーさんは委員会があるので先帰っててください」

「委員会？今から？」

「ええ、彼サボリがちなので」

桃は涼しい顔で帰路につこうとする結城の足を止める。

「なんでお前が俺の帰宅を邪魔すんだ」

「私も図書委員だからです」

クラスのもう一人の委員が積極的に参加してくれているおかげで今まで悠々とサボることが出来ていたのに。

「了解」

ヒラヒラと手を降る日向の横で、稲葉冥利は階段を見上げ、

「それじゃまた明日」

と小さく手を挙げた。

「行きましたか。ユーユーさん、ついて来てください」

「ほんとにお前図書委員？初対面じゃね」

二人ぶんの足音がなくなつたのを確認し、彼女は乳飲み子のよう
に掴んでいたシャツを放した。顔を覚えるのは得意ではないが、ど
んなに思い返してみても図書委員として桃と一緒に働いていた記憶

はない。

「さっきのは嘘です」

スタスタと来た道を戻り始めた彼女を追いかけ、柔らかな肩に手を置く。

「どういうことだ？」

「二人きりになるきっかけを作るため嘘をつきましたが、意味もなくサボるのは止めたほうがいいと思いますよ」

「お前……」

「なんです？」

本来ならばこちらが頭を下げなければ付き合えないような高嶺の花のような女の子だ。千載一遇のチャンスに等しい。

「考えてやらんこともないけど、あんまプライベート探るなよ」

「それに関しては謝罪します。こちらものっぴきならない状況なのです」

「愛が重たいな」

「……あなた、馬鹿ですか？」

「はい？」

桃は二年一組のくすんだドアを開け、先ほど自分が腰を下ろしていた椅子に座った。そこはモテない友達の席で、女子が借りて座っているって知ったら喜ぶだろうなあ、と思いながら結城も自分の席に腰をおろす。

室内は電灯をつけていないため薄暗く、閉めきったカーテンは穏やかな日光をぼんやりと透過させていた。

「桃ちゃん、一つ確認していい？」

「はい？」

「最近、……奇妙な夢を視るんだけど」

言ったらバカにされるだろうか、と逡巡しながら言葉を続ける。

「なにか知ってる？」

どうして私があるたの夢を存じ上げないといけないんですか、そういう答えが返ってくるかと身構えた彼の覚悟は徒労に終わった。

「ヒマワリから聞いたんですよね？夢は稲葉冥利が作りだした仮想現実の世界です」

「あ、ああやっぱり俺はファンタジー世界に迷いこんでしまったんだな。わかってたさ」

自虐ぎみに鼻を鳴らす少年に、桃は薄く笑みを浮かべ、

「ええ、ですからいくつか注意点を教えたくて、こうして呼び止めた次第です。ヒマワリばかりに負担をかけるわけにはいきませんものね」

肩を落とす結城に桃は手に持ったカバンからメモ帳を取り出し、ページを一枚千切って渡した。

「いいですか、ユーユーさん、ようく肝に銘じておいて下さい」
そこにはいくつかの注意が書かれていた。

- 1、夢の中に稲葉冥利はあらわれない。
- 2、夢は稲葉冥利が感銘を受けたものが色濃く反映される。
- 3、稲葉冥利に与えられたストーリーに逆らうと、夢が崩壊し、現実になんらかの影響が起こるかもしれない。
- 4、大抵は感覚として数分で終わる。
- 5、稲葉冥利は自分の夢が現実に影響を与えていることを知らない。

「わざわざ書いたのか？」

「ええ」

「ご苦労なこつたと目を通す。」

「やっぱり稲葉は自分の夢が不思議空間に繋がっていることを知らないんだな」

忠告を受けていたから、俺も教えることはしなかったが、

「認知されるとマズいことでもあるのか？」

結城の質問に桃は微かに言葉を震わせた。

「私たちが他者の夢に侵入できるようになったのは8年前だと説明しましたが、覚えていますか？」

「あー、夢の中で言ってたなあ。つまり稲葉冥利の夢は現実に影響を与え、お前らは安全弁として、その8年前だか会得した能力を活

用してるんだろ？」

「少し違います」

一区切りつけるように息を吸ってから桃は続けた。

「能力は会得したのではなく正確には被験体であった彼女の暴走に巻き込まれた一般市民が私たちだったんです」

一般市民が、というなんでもないようなフレーズの重要性が高いことを吹き出した冷や汗が知らせていた。

「どういうことだ？」

「8年前、奈黒で起こった昏睡事件をご存知でしょうか」

「……」

流れるニュースをぼんやりと眺めている6歳の自分、そのテレビの向こう側の世界が、自分のよく知る界限だったことに当時衝撃を受けた。

奈黒は、沿岸部に位置する小さな町だ。

「たしかガス漏れで集団災害が起きた」

「ええ、大規模一酸化炭素中毒事故、表向きはこうなっています」

「それが稲葉の仕業だったのか？冗談きついで」

都市ガスに含まれる炭素ガスが漏れ、住民一帯に被害を及ぼした、と新聞に書かれていたことを思い出した。

「催眠誘導能力に目をつけられていた稲葉冥利は、当時研究目的で奈黒の先の施設に運こばれていました。ところが車が横転事故を起こしたんです」

集団昏睡事件といっても、被害はせいぜい十数名、死者はいなかったはずだ。

「車から漏れでた冥利の念波は、子どもの脳に甚大な影響を与えませんでした」

「さて被害の大多数が大人だっただろうか」

「ええ、完成された脳は揺さぶる程度でしたが、発展途上の脳は冥利の念波に書き加えられたのです。正確には次元を引き上げられたというべきでしょうか」

「頭空っぽの方が夢詰めこめるってわけか？」

「他者の感応性を高め精神が無防備な時に干渉できる、稲葉冥利に似た力を得た子どもたちは、検査と称して彼女と同じ施設に隔離され、そこで自分たちの役割を理解しました」

彼の冗談は彼女に通じなかった。

「稲葉冥利の精神は不安定でちよつとしたことで磨耗してしまいました。8年前の事件は彼女が自らの力を自覚したことによって起こったのです」

彼女はそう言うってから彼の手にあるメモの5番目を指さした。

稲葉冥利は自分の夢が現実に影響を与えていることを知らない。

「混乱状態に陥った彼女は自らの精神をリセットすることによって自我の崩壊を免れました」

「リセットって」

「わかりやすい言葉で言えば、全てを忘れた、記憶喪失、逆行性健忘症の状態です」

そう言うってから彼女は立ち上がった。

「わかりますかユーユーさん。冥利さんにとって夢は現実であり現実には夢なんです。その矛盾を起こさなため私たちは自らをセーフティーと称しました」

「恨んではないのか？よくわからん非日常に巻き込まれて」

「仲間うちにそういう人もいますが、過半数が彼女を哀れに思っただけには研究所から稲葉冥利を連れ出すことに成功しました。全員が汚れを知らない純粹無垢な子どもとはいえ冥利さんのお陰で天才的な頭脳を獲得したのもいますから」

ヒマワリの「彼女は今は自由の身だからね」という言葉が耳に蘇る。

稲葉冥利は本当に研究目的で隔離されていたのか。

「土台があるからでしょう、最近精神がようやく年齢に追いついてきました。ユーユーさんが余計なことをしなければ、彼女はそのまま成長できるのです」

偉そうな物言いに結城はムツとなった。

「そりゃいつたいたいという意味だよ」

「我々の責務をご存知いただけただけのなら、今までのあなたがどれだけイレギュラーだったかわかりただいたはずですよ」

「稲葉の夢に巻き込まれたという点ではなんら変わらんだろ」

「いいですか、ユーユーさん。私たちは彼女の夢、ひいては精神、またはそれに繋がる現実を守るため、極力刺激しないようにしているのですよ。それをあなたは」

彼女の語気が強くなる。

「なにがスプラッタホラーですか！曲がり間違つて稲葉冥利が感銘を受け夢の内容がソレになったらどうしてくれるんです」

「演じりゃいいだろ。ゾンビを。ストーリーに則つて」

「突拍子の無い物語はそれだけ破綻が生まれやすくなります。なるだけあたりさわりの無い、出来るだけ現実に近い内容を稲葉さんに提案してる私たちの苦勞を考えてください」

そういえばヒマワリは「日常ギャグ」「コメディ」。桃は「青春小説」と確かに現実的なジャンルを選択していた。

「はいはいわかりました今度からそうしますよ」

「ほんとくれぐれもお願ひしますよ」

線路は灼熱に揺れ、空はいまに落ちてきそうなくらい高く遠く広がっている。風に吹かれた蝉の声はどこまでも響き渡り、滴り落ちる汗が真夏を象徴していた。

「またかいな」

目の前に広がるありえない光景に、結城はがっくりと膝から崩れ落ちた。

「あいつ、気に入ってやがったな」

敷き詰められた砂利が音をたて、彼の苦惱を演出していた。

「あれま、ユーユーの言つてたシチュエーションのようだね」

「たしかスタンドバイミーですか」

いつの間にかあらわれたヒマワリと桃の二人は降りかかる夏の太陽光に目を細め、炎天下で歪む線路の先を見据えようとした。

「これってストーリーがあんのかな」

「さあ。また場所だけじゃないですか。とりあえず歩きますか。そういう話なんですよ」

「そうだね。さっ、ユーユーほら立って」

半ば予想はしていたが睡眠をとらぬわけにもいかず、ベッドで朦朧としていたら、いつの間にかまた稲葉の夢に引っ張られたらしい。

夢のなかの真夏のなかで

夢だと分かっているのに玉の汗が頬をつたい、レールの上にポタリと滴を垂らす。ベッドの中の現実の自分もサウナのように籠る熱に苦しんでいる筈だろう。

夏には早い6月の空。稲葉冥利の夢の中では、青い空に白い入道雲がムクムクと沸いていて、絵に描いたように季節を象徴しているようだった。

やっぱり彼女達に付き合うのは間違いだったんじゃ無いか、と自問自答を繰り返し、未だに答えは出ずにいる。确实だと胸を張れる回答が思い浮かばずにいた。

「これでわかってもらえましたか？」

「なにがだよ？」

「あなたが冥利にどれだけの影響を与えているかです。この世界はあなたの無責任な発言によって創造されたのです」

目の前には想像としての熱に頬を赤く上気させた桃の姿があった。真っ直ぐ澄んだ瞳は彼を見据えている。

「迂闊な発言は身を滅ぼすということがお分かりいただけのなら、あなたがとるべき行動は何か」

「ふん、言いたい事があつたらはつきり言えよ」

「そうですね。単刀直入に言います。稲葉冥利から離れて下さい」
一陣の風が吹き抜けた。

どこか寂しさを孕んだ、冷たい風だった。不思議な感覚だ。真夏の情景なのに頬を撫でるのは秋の涼風、真冬の木枯らし。その矛盾が夢という幻で造り上げられ、凍てつくような感傷に胸を締め付けられた。

「桃ちゃん！」

言葉が紡げず口ごもる彼に代わって日向葵が仲裁に入るように声を上げた。

「言い過ぎだよ！ユーユーの行動を縛る権利はあたし達にはない！」

「ですが危険因子は早めには排除すべきでしょ？違いますか？」

「冥利ちゃんが必要として、ここにいるんだ。ユーユーを退場させるのは早急な判断に決まってる」

「それが危険だと言うのです」

ため息をつき愁い顔で少女は続けた。線路脇に繁茂した背の高い夏草が風でさわさわと川の流れのような音をたてている。情景すべてが錯覚としても彼女の言葉は自分自身の妄想ではないだろう。

「八年前を思い出して下さい。希望的観測の失敗は私達が身を摘まされて理解している筈でしょう。手遅れになってからでは遅いんです」

「それとこれとは別問題だよ。冥利はユーユーの助け、アシストを求めているからこそここにいるんだ。あたし達が判断することじゃないって」

二人は半ば口論に近い言い合いを始めた。結城はその横で一人仮想空間の空を見上げ、創造主たる稲葉冥利の幼すぎる顔を思い出す。彼女がこの場にいたら二人を止めるだろうか。それともなにも言わず俯くだけだろうか。

どちらにせよスコールが如く降り注ぐ蝉時雨が耳についた。

「うるさい」

口をついた単語の鋭利さに桃と日向は目を丸くして結城を見る。「知るか！」

何で行動を制限されなくちゃならないんだ。誰がなんて言おうと、俺は自由を享受する立場である一中学生に他ならない。

蓄積したイライラは怒号となって彼の口から飛び出した。

「超能力だろうが、作文部だろうが、てめえらで好き勝手すれば良いじゃないか！」

「落ちて着いてよユーユー！」

日向が宥めるが、溜まりたまった彼の怒りはそう簡単に収まるものではなかった。

「俺は俺がやりたいようにやってやる。制限も節制もかなくなり捨てた今なら」

視界がグラリと歪む。夢の終わりが訪れたらしい。線路は溶けた消しゴムのようにグニヤリと歪み、木々と空とが混じりあってアンバランスな色合いを滲ませていた。

「ユーユー！」

呼び止めるためにかけられた日向の言葉が眠りという瞼の裏のスクリーンにこだまするが、彼の意識は陽炎のように立ち消えていた。今なら、……なんだ？

一匹の蝉の鳴き声が断末魔のように暗闇に線を残し、無情感を植え付けた。

枕が汗で湿っていた。

夢の終りまで人権を無視した言い種、目覚めは最悪であり、睡眠をクッションに挟んでも、イライラは再燃する。

夢の中の出来事とはいえ、それが現実に彼女達から言われた言葉だと分かっているのは気分が晴れることはない。

それでも疲れが残っている割には彼の脳は迅速に稼働した。どうにかして自分の存在を日向と桃に知らしめる方法はないかと模索し、思い付いた方法に結城は一人首をふった。

これはダメだ、ルール違反だ。だけど……。

桃の言葉と日向のしたり顔が脳裏にちらつく。まるで人を稲葉のおまけみたいに。

俺は、

感じた微かな劣等感、そこまで繊細な人間ではないはずなのに、このイラつきは何処から来るのだろう。

……違う。

ベッドの上で考え付いた回答。それは、日向や桃のことではなく稲葉冥利のことだった。

思えばすべて彼女に起因する事柄だ。

彼女を観察対象としていることに、ムカついているんだ。命は平等ではないが、同じ人間を危険とし観察するのはフェアじゃない。そこなんだ、

俺が納得出来ないのは。ルールとかじゃない、稲葉は、普通の、少し暴走しがちな女の子なんだ。

纏まらない思考に折り合いをつけ彼は一種のいたずらめいた覚悟を固めた。

朝御飯を食べ終え、登校し、短い挨拶を稲葉とかわす。

一昨日のように他のクラスメートの目がある場所では、後程厄介なことになるということを心得てくれたらしい。二人とも距離の取り方は十二分に理解していた。無口で人付き合いが苦手な彼女は、あのと無責任な推測をするかましい人垣に囲まれ、言葉を濁し、余計に誤解を招いていた。

女子の集団に割って入る訳にもいかず、いつの間にか稲葉と結城は好きあっているということにされていた。2日かけてようやく誤解が溶けてきたのだ。噂をぶり返させる訳にはいかない。

「結城昨日四組のマドンナと教室でなにやってたんだ！」

いつももつるんでいる友達が憎々し気に声をかけてきた。どうやら桃と一緒に居たところを目撃されたらしい。

第三のモテ期が……、と冗談を言う気にはなれず、「あいつの話はしないでくれ」

と、無表情に答える疲労した口調に友人は悲しそうな瞳でこつちを見ていた。

ホームルームが終わり授業が開始する。結城は教科書の適当なページを開き、机にノートを広げた。授業内容の書き写すためではない。

黒板では教師が平家物語の冒頭を熱心に説明していたが、彼の意識とそれに従事するボールペンは、ノートに宇宙を書き出していた。

【水が空気が食料が資源が……尽きぬことのない人間の欲求はこの星を死の世界に変えてしまった。宇宙技術は進化したが生物が生息できる星を見つけ、そこに行くまでの費用と年月を鑑みたとき、人類に未来は残されていないかった。】

そんな折りに北極で何処までも続く不思議な穴が発見された。地球空洞説が立証されたのである。調査団が世界中で組織され、屍のような人類の瞳に再び火がともった。穴の底にあったのは、地底人が暮らす地下帝国ではなかった。通説通りコアやマントルにたどり着いたわけでもなく、人類の目の前に広がったのは地球と同じような惑星の姿だった。天文学者はあり得ないと言い、幾人かの地質学者は目の前の非現実性に首を吊った。俗にいうパラレルワールドの存在に人類は歓喜した。喜ぶべきはその世界の文明は自分たちから見て一昔前のレベルだったことある。資源問題はもとより、抱える問題の解決をはかるため人類は先住民に交渉を行うことにした。】

「ユーユーこれ違う」

彼女の意見は尤もだった。彼らが部活で、決めたジャンルは青春小説であり、

結城が綴ったのは明らかにSF小説。少なくとも、冒頭だけで、その後の展開は容易に想像がつく。

「どういうこと、ですか？」

桃が震える唇で、結城の意図を探ろうとした。

「青春てのは若者視点で描かれてるもんだろ？」

しれっと彼は応える。

「これから裏世界の人間達との紛争が、少年兵士の目を通して行われるんだ」

「何をバカな……」

桃は言葉を失い、顔面蒼白になった。

空想を夢というフィルターを通して現実にする稲葉冥利の前でする話ではない。

険しい顔つきの日向の横で問題の張本人たる稲葉はキョトンとしていた。

「わざと、ですか？」

「なんの話かわからないな」

「ふざけるのも大概にしてください！」

かたんと音をたて椅子から立ち上がり桃は声をあらげた。目は静かな怒りに満ちていた。

彼女の袖を小さくひき、着席を促した日向が落ち着いた語調で、桃に代わって口を開く。

「ユーユーには悪いけどあたしもこれは違うと思うな。青春小説に非現実的な要素はないほうがいいよ。ねっ、冥利」

稲葉冥利に話をふった。同意を得られることが前提としての意見誘導だ。

「うん。野蛮なのは好まれない」

「甘い稲葉」

日向に乗せられている彼女を一笑し、結城は続けた。

「パラレルワールドが主体の戦争ものとはいえ、世界を隔てているからこそいろんな伏線が貼りやすいんじゃないか」

「それは良いかも知れないけど、設定が難し過ぎる。もう一つの世界とか頭がこんがらがって来ちゃった」

「簡単過ぎると物語に起伏が生まれないだろ？それにこれくらいのほうがやり易いって」

「そうだろうか・・・」

「それに今パツと思いついたんだが、このもう一つの世界ってのは実は過去の地球で歪んだ時間干渉を行っていたとかどうだろう」

「うーん」

どうやら穏便なストーリーを求める日向や桃はともかく、肝心な稲葉すら乗り気にはなれないらしい。

放課後、作文部としての活動を行っている四人だが、部活申請として提出した書類が受理されるまでいくらか時間がかかるらしい。

担当教員の問題など部活として認められるにはまだまだ課題が山積しているようである。とはいえ、活動を行わないわけにもいかず、作品内容を具体的に決める作業が引き続き行われていた。

そのタイミングで結城が持ち出したのが、授業中書き上げたSF小説の冒頭とそのプロット。

桃と日向にはすぐにわかった。自分の意思を蔑ろにされた結城裕也の細やかなる復讐なのだ。

「それでは主題が目標からずれてしまう、青春小説が主のはず。昨日ユーユーが例に挙げた作品のように」

稲葉冥利は取り巻く人物達の歪んだ思惑を知らない、彼女はただ単に作品を作りたいだけなのだ。

仕方がない、奥の手だと、結城は考えていたとっておきのアイデアを披露する。

「世界を隔てているからこそ切ないラブストーリーを展開できるじゃないか」

今までの彼女の選考から稲葉の望む展開というものを大方把握していた。これならばほぼ十中八九食い付くはずだ。

「で、でもそれじゃあ・・・」

それがわかっていいるからだろうか、日向の表情が一瞬で曇り、何かしらの反論をしようとして口を開けたが、なにも出てこず、口ごもった。彼女の代わりと言わんばかりに稲葉冥利は朗らかな笑顔を浮かべ手を叩く。

「それすごくいい」

「だろ？」

計画通りに進んだ物事にほくそ笑む。稲葉の意見をコントロールするのはヒマワリ達と同じようで癪ではあったが、たまにはあり得ない展開の作品に触れてみるべきだろう。

「……最低」

桃が小さな呟きが耳に残ったが、気にしないことにした。

滅びされ、幻

「間違っています」

桃が、露骨に顔をしかめ机に前のめりに立ち上がった。

舌打ちをすんでのところどころでこらえ、結城は怒りで頬を赤くする少女を見る。

「SFというジャンルは青春小説に当てはまりません」

「しかし、昨日おたくが言ったんだぜ？」

若ければ青春だって」

「あなたの作品には、テーマの一貫性がありません。ハチャメチャでメチャクチャです」

「言われる筋合いはねーよ」

にらみ会う。そんな二人の間で日向はやれやれといった風に肩をすくめ、稲葉はオロオロと視線を漂わせた。

「いいですかユーユーさん」

桃はため息をついてからいたずらをした子供をたしなめるような口調で続けた。

「そもそもSFはサイエンスフィクションの略称だということはご存知ですね？」

「まあ、それくらいはな」

ペースにのまれないように注意を払いながら返事をする。桃の眼光は尚も鋭い。間に挟まれた稲葉冥利と日向葵の二人は、

「そうだったの？」

「あたしはてつきり『少し不思議』の略かと思ってたよ」と、ボソボソと囁き合っている。

「あなたのプロットには科学的なことが微塵も描かれていない。地球空洞説は都市伝説に過ぎないですし、もう一つの世界だなんて虚構に憧れただけの恥さらしです」

「科学的じゃなくてもSFは書けるだろ。お前のはハードSFに限

った話じゃないか。そもそもSFだって思想小説とする見方があるんだ、線引きなんて受け手で異なるんだからよ」

「どちらにせよ中学生がおいそれと手が出せるジャンルじゃないです。大前提としての青春小説の部分がSFに飲まれて霞んでしまっています」

「考え方が古いな。浦島太郎だってかぐや姫だって、俺にとっちゃSF小説だぜ」

「パレルワールドを主題においては不可能です。どこにジユブナイルが入る要素がありますか？」

夏を迎えた6月の空気は澄んでいて、カーテンを揺らし教室に涼しげに運んでできていた。天然のクーラーの役割を果たすそれだが、桃と結城との間に流れる険悪な淀みを流すことはない。

「固えーな。んじゃお前はどんな青春小説が書きたいんだよ」

「私は．．．」
「ろくに思い浮かんでもないくせに他人の作品にケチをつけるのだけは一人前だな」

「ち、違います！私は、現実的な要素のみで構成された一般向けの作品が良いかと」

「どんな話だよ。例えば？」

眉間にシワを寄せて彼女押し黙った。

「アイデア出し合うのがこのクラブの目的だろ？」

鼻でせせら笑ってから、結城は稲葉に軽く視線を向ける。

「お前はなんかアイデアあるか？」

あからさまな挑戦状だった。稲葉と俺とで話を膨らませる前に止めて見せるという、暗に含んだ不敵な笑み。純粋な怒りが少年にわく。

「そうだね」

苦虫を噛み潰した表情の桃とは対照的に稲葉冥利は柔らかな笑顔を振り撒いた。

「さっきは反対してたけど、スペースオペラに近い、宇宙船のよう

なものは出したい」

「待ってください」

遊びに水差すタンマの声を桃が上げた。

「桃ちゃん？」

「忘れてませんか？新人賞に応募するのですよ」

稲葉冥利はキョトンと首を傾げ、「覚えてるけど」と小さくぼやいた。

「でしたら描くのが楽しいという理由だけで話作りをしちゃいけません」

「何が言いたい？」

言いくるめたと思つた矢先での反論、結城は出来るだけ冷静になるよう静かに尋ねる。

「トレンドを理解した上で斬新なアイデアが必要なのです。簡単にいえば大多数のニーズに応じた商業的に大成するであろう作品」

「流行に流される、と」

「そうは言っていないません。私達に求められているスキルは出版社の立場で自分達の作品を見ること、客観的に売れるジャンルを見極めることです」

「一理あるが、結局何が言いたいのかわからないな」

「失礼かも知れませんが」

そう前置きしてから桃は続けた。

「SFがトレンドイであるかといえばそうではないはずですよ」

「だからSFであつて青春小説であれば
だな」

「その作品がSFを絡めている時点で入賞は難しいかと」

「根拠がねーだろ」

「何千通の応募作品があるんですよ。先程の冒頭じゃ話が本筋に入る前に落選してしまいます」

面白さはもとより、売れるかどうかではSFは微妙、というのが桃の主張であつた。

「読ませる文章、引き込まれるであろう冒頭、単純な経験値としての文章力が足りない私達が勝負すべきはジャンルとアイデアしかないはずです」

放課後の雰囲気冷たい言葉尻に含ませて彼女は鼻をならした。

「SFでは理屈的なことを記さなければならぬぶん条件をクリアするのが難しいと思われませう。やはり青春小説という枠組みにSFは濃いですし、やらないほうが得策です」

「私はそうは思わない」

反論を考える結城の代わって声をあげたのは、嵐の中心に立っていることを自覚していない稲葉冥利であった。

「文章力と経験値に関してはユーザーのスキルがカバーしていると思う。ジャンルに関しては多少気を使うくらいで平気だよ」

静かだが力のある評価に結城は微かに耳を赤くして、照れ臭そうにこめかみを搔いた。

本人に自覚が無かろうと作文部において稲葉の決定は結論でもある。それを理解しているのもあろう、一同は彼女の言葉を神託のように黙って受け取った。

「ほだされた訳じゃないけど、確かにSFなら真新しいものから古典的なものまで幅広くチャレンジできるし、多岐にわたる要素を取り入れられる。複合的な割合、他者との差別化をはかるという意味でこのプランでアイデアを固めていきたい」

言葉を区切り他の三人を見渡すように彼女はゆっくりと首を動かした。

「みんなはどう思う？」

「私は、私はやっぱり反対です」

急かされるように慌てた口調で桃は声を荒げた。当たり障りのないシチュエーションを選択したい彼女達にとって、可決しかかっているSFというジャンルは、真逆といっても相違ない。

「納得出来ません」

彼女の言葉が終わるのを待って、落ち着いた口調で日向葵が口を

ひらいた。

「あたしも反対かな。青春っていうからには誰もが経験してきたことを主題に置くべきだよ。そこを履き違えて他ジャンルで勝負しては、出版社の意にそぐわないものとして処理されちゃうしね」

稲葉は一度こくんと可愛らしく頷き、顎に指をあて物憂げに結城の方を向いた。

「2対2だね。ユーユーは賛成派でしょ？」

「当然」

稲葉。勝ちなんだ、お前がこっちに転がってきた時点で。

結城は冷静を演じながらも内心ではガッツポーズをとっていた。作文部という狭いコミュニティの中では、稲葉冥利が創始者であり教祖であり神なのだ。彼女は知らないだろうが、俺はお前の想像力の遅しさは十分理解している。

したり顔で傀儡師としてお前の妄想をコントロールするやつらはもういない。

稲葉冥利、お前の想像力は、自由だ。

その晩、見た夢は、言葉では言い表させられない爽快感を含んだものになった。

ただっ広い世界に浮かぶ宇宙船。地面という概念は存在しない。辛うじて船内には重力が存在していて、窓の外の砂金を黒い画用紙にばらまいたかのようなキラキラと瞬く星ぼしが自身を取り巻いていた。青白い光に照らされ、状況が掴めずポカーンとしていたのは一瞬、すぐに稲葉の催眠誘導能力が始まったのだと自覚し、一人コツクピットの中で絶叫した。

「うわああああ！」

ゲームセンターのベルトを締めるタイプのアーケードにそっくりだった。どうやら稲葉冥利はそれほど機械の作りに拘る性格ではないらしい。しかしながら操縦を放棄された機体は、とまりがけの独楽のように重心がぶれグルグルと宇宙空間を音もなく回転しはじ

めた。

全て稲葉冥利の想像物だからであろう、突発的な不快感に襲われることはなかったが、視界に入ってくる回転の軌跡と点から線になった色とりどりの星達には、直接的な被害はないとはいえ段々と気分が悪くなってくる。どうしたものかと、感じることはない遠心力に飲まれながらも首を捻る。

「技術的なことは必要ありません。ただそれっぽいことをすれば良いだけです」

内部に少女の声が響いた。タクシーで無線が入ったときのようにノイズがかった音声だったが、その声は確かに桃のものだった。

「おっ、おっー」

言われた通り放置されたままだった冷たい操縦菅を握り、手前に倒してみたら機体はバランスを取り戻し無事平行飛行を開始した。

「マジだ。稲葉も相当適当だな。桃ちゃん、助かったわ」

どこにマイクがあるのか知らなかったが、相互通信は可能らしい、いつもの皮肉めいた文句が機体内部に響き渡った。

「冥利は本来SFには詳しくないのです。それを無理やりあなたが矯正するから綻びが生まれてるんですよ」

「まあいいじゃん。下手にミリオタだったりしたら今頃お陀仏だぜ」

「重大さがわかってないみたいですね。ここまであからさまなフィクションだと我々がどのような行動をとるべきなのか全くの未知数、実際に死ぬかもしれません」

「おいおいまさか。夢のなかで死んだって実際の生命活動が停止するわけじゃあるまいし」

「かもしれないし、そうじゃないかもしれないし。いくら鈍感だろうと、ここまで協力的な念波、人間の脳を止めることくらい容易いはずです」

向日葵も似たようなことを言っていたなと結城は慣れてきた操作で機体を操りながらため息をついた。

「そんな状況を作り出したんです。それなりの覚悟はお持ちなんで

すよね？」

ナイフのように鋭利な彼女の言葉が鼓膜を突き刺す。

「そんなものねえーよ」

ヘラヘラとした返答に誤魔化は存在していなかった。

ザーザーと流れるノイズには桃の微かな吐息が混じっており、無言で彼の言葉を咀嚼しているらしい。

「俺はただ稲葉の想像力に限界がないことと、単純な自分の興味、管理者めいたお前らの物言いに腹立っただけだ」

そのてらう事のない真摯な言葉は、彼の純粹な本意の現れだった。

「こっとうとき、あきれた、とコメントするのが正しいんでしょうか」

「知るか」

両隣に戦闘機っぽいデザインの機体が二台、結城の操縦機に寄り添うように飛行していた。

ガラス越しのコックピットには四組の女生徒座っている。桃が左手側、日向が右手側だ。

「どつやら、あの艦隊をのせば良いみたいだねえ」

面倒な状況を招いた結城を責めることなく、日向の声が通信機を通じて彼の耳に届いた。

前方に視線をやれば、レトロチックな宇宙船が何体か連なって飛行していた。宇宙空間の設定だというのに、大戦中空を飛び回っていた戦闘機のようなのである。自分達の機体も似たようなものなので強くは言えないが、あんなデザインの飛行機が宇宙を飛び回れるとは思わない。

稲葉冥利は単純に戦闘をして勝利というストーリーを望んでいるのだろう。

「面白くなってきた」

自己の願望を叶える為のものではなく当て付けで提案したSFというジャンルだったが、心の奥底で静かな興奮がわいてきているの

が
わ
か
っ
た
。

宇宙戦争反省会

耳障りな爆発音が絶え間なく響き、赤や黄色の火花がチカチカと視界の両端で色鮮やかに弾けていた。

機体内部は息苦しかったが、花火大会の幻想的な光景のように、興奮が肌を駆け巡る。

「ユーユー出すぎだよ！下がって」

向日葵は心配性なだけだ。どんなに油断しようと敗北はあり得ない。彼女の忠告を無視し操縦首を前に押し倒すと、滑るようにスムーズに機体は前進した。段々と理解してきた。どうやらイメージを明確にしているから、適当なモーションをとれば、機体はどのように操作できるらしい。

すれ違いざま、また一機撃墜する。

敵艦隊はどう鼻屑目でみても強くなく、ただやられるためだけに存在しているであろうことが丸わかりだった。

「ユーユー！」

半分以上ゲーム感覚だ。最近のシューティングゲームより難易度はひくいが、体験のようなりアルさがある。

「ここで君が傷ついたりしたら、冥利に矛盾を与えることになるんだよ！」

それっぽいボタンをおせば、炎を上げて敵機が赤い花を咲かす。

酸素のない宇宙空間で燃焼しているものはなんなのか振動として伝わるこの音はなんなのか、科学的根拠は全くといって良いほど乏しいが、稲葉冥利の妄想の世界では何でもありなのだ。

「は、ははっ」

気づけば笑みが零れていた。

普段感じることもない爽快感、全身を包む高揚、テンションは非日常的な体験として、自ら制限出来ない範囲まで上がりきっていた。「バカッ！」

語彙も何もない桃の怒声が鼓膜を震わせ、包み込む高慢や傲慢やらを根こそぎぬぐいさり、どこかテレビゲームをプレイするように俯瞰していた彼の精神は現実に戻される。

「バ、バカとは」

「僅かな綻びが冥利の自我の崩壊に繋がったらどうするんですか！」

「まさか、ただの夢だぜ」

「あなたは何を理解してきたんです!？」

桃の怒号はなおも続く。受け流すわけにもいかず、結城は下唇を噛んだ。

無限に広がる宇宙空間、ちっぽけな会話をしているはずなのに、無視することは許されないみたいだ。

「個人の尺度で測れる現象ではないことくらい、いくらなんでも、わかっているはずでしょ？」

「だからと言って俺の行動を縛る理由には」

「その選択が、最低限の保証を果たしているのなら、文句は言わず、昨日言い過ぎたことを謝ります。だけど、いまのあなたにはプライドも、何も感じられません。玩具を取り上げられた子供が喚いているだけです」

「ふざけんなよ、実験だ臨床だと好き好んで稲葉の夢に介入するお前らが言えた義理じゃないだろうが」

「ごもつとも、です。踏まえた上で私は、あなたを許せない」

音声のみで彼女の表情はうかがい知れないはずなのに、気の強い瞳に見透かされているような気がした。

「お願い、だから」

反論の余地はなかった。正確には、浮かんだ言葉をそのまま使えなかったのだ。

「冥利を苦しませるような真似を、とらないでください……」

いつの間にか彼女の声は震えていて、きつとボタンのような瞳を湿らせているのだろう。そう思うと、自身の言葉は薄っぺらな言い訳にしかならない気がして、結城は黙るしかなかった。

無声映画を流し見しているように事後は速やかに進んだ。桃も、結城も、ムードメイカーたる向日葵でさえ口を開く事はなく、残った敵機体を彼らは掃討していった。チームワークを意識したわけではないが、確実に危険をおかすことなく、丁寧に。

最後の一機を片付けた時、夢は終わりを迎え、結城はもやもやとした感情を抱いたまま現実世界のベッドの上に戻されていた。

残滓としての浮遊感だけが、結城を包み込んでいる。

「間違えだらけだ……」

漏らした呟きは初夏の爽やかな寝室の空気に溶けて消えていった。

学校に着いたとき自分を取り巻いている憂鬱が、不登校児の心持ちだということに純粹に驚いている自分がいた。心臓が肋骨に挟まれているようなじくじくとした痛みが彼を苦しめる。

教室につき、男友達と他愛のない会話をしている最中も自分の将来を考えているときに起こるような慢性的な焦燥感が消えることはなかった。

「おはよう」

当事者であり原因者であるはずの少女の朝の挨拶は晴れやかで、見ているのに妙にイラついた。

「私、あれから考えたんだけど、」

いつかのノートを手にもって彼女が端的な微笑で結城の机に寄ってくる。

「あ、ああ。またあとでな」

「……そう」

静静と自分の席に戻った稲葉冥利の横顔を見ながら、休み時間に向日葵と桃の二人に謝ろう、と思った。

「悪いけど擁護できないなあ」

二年四組はすぐ近くだ。顔を知っている程度の友人も何人かいる。その子に頼んで桃と日向を廊下に呼び出してもらった。

「ユーユーの行動は浅はかで愚かな行為だったからね」

「俺もやり過ぎたとは思っている」

「その言葉のあとに「だけど」が続くんじゃよ？」

「.....」

向日葵の表情はいつものように笑顔だったが目が笑っていなかった。

「あたしにも反省すべき点はあったよー、でもユーユーのように他人の胸を借りた自暴自棄になんてならなかった。少し日本語おかしいけどさ」

素直に昨日の夢のなかでの行動を謝ろう、そう決意して、中休みの往来の激しい廊下に二人を呼び出したのだ。分別は弁えていると思っっている。

「何度も説明するように、稲葉冥利の精神は飴細工のように繊細で細いロープみたいなものなんだよ。彼女の精神を、君は危険にさらしたんだ」

ただでさえ髪を金色に染めた少女は目立つし、どうやら彼女は四組の中心的人物らしい。加えて一見おしとやかそうな桃を呼び出しているのだ。何事かと彼ら三人の会話に聞き耳をたてるやからがいても不思議ではない。それらを理解してか、向日葵の声は一段階低くなった。

「夢の矛盾は稲葉冥利の自我の崩壊に繋がる。何回も言ってるよね？」

「大事にならなかつたんだからよかつたじゃねーか」

言うてから、しまった、と思った。

すぐさま訂正の声を上げようとしたが、まるで虫けらでも見るように冷ややかな向日葵の視線が自身をいぬいていることに気がつき彼は言葉を飲み込んだ。

「あつ.....」

失言に対する謝罪の言葉をあげるより早く、パシンという音と共に頬に鋭い痛みが走った。数秒遅れて、廊下がざわめく。

「最低っ！」

目に怒りをためた桃の爆発だった。

刺激に飢えた中学生達が、野次馬根性丸出しで今後の展開をニヤニヤと見守っている。それを忘れていたわけではないだろうが、それほど結城の発言が、耐えられなかったということだ。

彼女は「反省してないじゃないですか！」と、半ば怒鳴るような一言付け加え、すたすたと教室のドアを開け、結城の視線から消えてしまった。

ジンジンと痛み出した左頬に、意識をゆっくり取り戻し、

「ちが、違うんだ、俺は」

無様に言葉を続けようとした彼に、与えられたのは、

「誰に言い訳しようとしてるの？あたし？桃ちゃん？それとも、稲葉冥利？」

「あ……」

「もう、いいよ」

冷たい布にくるまれた呆れの声だった。

なすすずでもなく一組の教室に戻った彼を出迎えたのは無遠慮な噂話の嵐だった。本人が帰るより先に伝えられた早すぎる伝聞は、二股がばれただ、痴漢行為をはたらいただ、的にカスつてもいない、聞いてて鼻でわらいたくなるような与太話ばかりだったが、誰も詳細を直接に尋ねるほど厚かましくなく、一人落ち着いて考えを纏めることができた。

俺が、謝るべきは、当然稲葉冥利なのだろう。だけど彼女に直接認知されるのはマズイ、と言われていたから向日葵達に謝ったんだ、なのに、

「ユーユー」

「ん？ああ」

後悔と反省の心はいつの間にかイライラにかわり、彼を盲目にしていたらしい、いつの間にか、稲葉冥利が仏頂面で席の前に立って

いた。その様子を遠巻きに他のクラスメートが見ている。

「頬、赤くなってる」

「ん……ちよつとな」

「そう」

濁された時はふみこむべきでないと彼女はわかっているのだろう。稲葉は無言になって結城をじっと見つめた。

「なんだよ？用がないなら話しかけんな」

徐々に膨れ上がる苛つきを押さえることが出来ない。八つ当たりだとわかっていても言葉が刺々しくなってしまう。

稲葉はそんな彼の態度に首を捻りながら少しだけ微笑んだ。

「昨日の夜、ずっと考えてた。どうすれば、桃ちゃんや向日葵を納得させられるかって」

「……それで？」

「日常から非日常への転換点をはっきりさせて、主人公の行動目的に……」

稲葉冥利が、口を開いている。

なのに何を言っているのか、彼にはよくわからなかった。

「こうすれば、きつと二人も納得してくれる」

見るものを虜にするような魅力的な笑顔で締めて、彼女は手を叩いた。いつもなら気にもならないその所作に無性にイライラする。

「なあ」

「ん？」

「別に二人を無理やり納得させなくてもいいんじゃないか？もともと俺たちだけで始めたことだし」

冷静に振り返ってみればそうだった。あいつらが勝手に干渉してきて眉唾なルール押し付けてきただけじゃないか。それに従う由縁はない。

「ダメだよ、ユーユー」

彼の言葉に稲葉はいたって当たり前のことを言うように、続けた。

「桃ちゃんも日向も、同じ作文部の仲間なんだから」

「……………」

「やっぱり全てのメンバーが納得の上、設定を突き詰めていかないと。クラブなんだから」

「仲間ねえ、向こうはそう思っていないかもよ」

「……桃ちゃんもヒマワリも、もちろんユーユーだって、同じ作文部の仲間じゃない」

「知らねーよ」

「え？」

だめだ止める！心のどこかの制止をふりきって溜めきつた怒りを彼は吐き捨てた。

「作文部なんざやってられるか」

「どうしてそんな」

「なにが小説作りだ！なにが、青春小説だ！くだらない、不在な才能を誤魔化すための数集めなら、俺は必要ないじゃないか！」

「ユーユー？」

「無能な有象無象が集まったって、腐りきつた蛆分しか書けねーに決まってるだろ！夢見ちゃってバカらしい！」

「ど、どうしたの、ユーユー」

「頭が軽い中学生の作文なんて読まれる前にシュレッダーにかけられるのがおちだろ！俺らのしてることなんて無駄の極みなんだよ！」

「な、なんで、急に、そんな、昨日まであんなに乗り気だったのに」

「おかしいんだよ！なんだよっ！面倒くせーよ、お前はよっ！」

言っつて最低だとわかる。ただの、八つ当たりだ。だけど、頭まで上りきつた熱は、アルコールのように踏み出せなかった一歩を彼に進ませる。例えその先が崖だろうとも。

「外枠さえいまだに埋められない部活に存在意義なんてあるわけないだろ！」

「だ、だけど、作文部は」

「うるせー！！！」

立ち上がって机に拳を叩きつける。

ドンと大きな音がして、クラス中の視線が集中するが今さらそんなこと気にもならなかった。

お前らはいいよな、バカげた世界に巻き込まれなくて。

「作文部なんて、てめえらだけでやってろ！俺は止めさせてもらおう！」

「ま、待つてよ！ユーユー！」

フックから引ったくるようにして鞆を肩にかけて、教室をあとにする。

「腹痛いから早退する！」

教室中に宣言するように叫び、彼は教室を後にした。

これで仲がいい友人が教師への対応はなんとかしてくれるだろう。問題は残ったクラスメイトとの対応だが、今は何もかも面倒だ。

後をつけてきたらしい稲葉が泣きそうに不本意な結城のあだ名をさげんでいるが、無視して彼は下駄箱に向かった。

彼女に小説と一緒に書こうと誘われたあの時のようだと言ったが、すぐに大きなムカつきが到来して和みかけた彼の精神を飲み込んだ。

真夜中のグシャグシャ

両親が共働きの結城家では、母親は夕方になるまで帰ってこない。兄弟は今年大学生になった姉が一人いるが、サークル活動が忙しいらしく帰宅はいつも夜になっていた。

サボりを見咎められることなく、自室に辿り着いた結城はだらしのないほどはつきりとしたふて寝を始めた。制服から着替えぬまま、ベッド倒れこんだ彼の鼓膜が、骨が軋ませる残響に揺らされる。毛布も被らず、現実から逃げるように開始された睡眠。単にやることになかったからというのもあるし、意識をシャツアウトしなければ自らの最低行為に対しての自責の念を強くしてしまうからでもある。

夢は見なかった。

疲れているからか。何日かぶりの平穏とした眠り。身体の芯までリラックスしているのを無意識下で感じる。

なのになぜだか、少し寂しかった。

目を冷ましたのは、数時間後、時計を見ていないので正確な時刻はわからないが、開け放たれたカーテンの向こうの空は暗く、既に夜を迎えているようだった。耳が痛くなるほど静かな夜だ。

「っ、はあ」

呻くようなため息をついてから、上半身を起こす。枕の横に置いておいた携帯をポケットに突っ込みゆっくりと立ち上がると、視界の端が立ちくらの黒いもやにじんわりと侵食されていった。ろくに寝返りをうたなかったのだろうか、身体の節々が凝り固まっていて、血流が滞っている気がする。季節は初夏といえど、毛布を羽織らなかつたので身体の芯は冷えていた。そのくせ制服のシャツは汗で背中に張り付いている。

鈍く痛む額に手をあて汗ばんだ足の裏でペタペタと、階下のリビ

ングにむかう。

「母さん、ご飯は」

室内は不気味なくらい静まり返っていて、ぼんやりと夜の色に染められていた。首を捻りながら、壁に備え付けのスイッチを入れると、数回瞬いてから暗闇を切り裂く明りが灯る。

まだ帰ってないのか。

当たり前の結論に至った結城は、時刻が気になり水槽の上の壁掛け時計に目をやった。

アナログ時計の短い針は12を少し過ぎたところ、1時17分。電池でも切れているのだろうか。そんな時間でこんなに暗いはずがない。ましてや午前なんてことはありえないだろうし。

めんどくさいが仕方がないと、ポケットから携帯を取り出して、液晶に表示された時刻を確認してみる。電波で受信する時間に間違いがあるはずがない。

「ん？」

13:17。

デジタル表示が、点滅しながら彼に時刻を教えていた。背筋にうつすら寒気が沸いてくる。偶然、偶然だ、と混乱しながらも、秒数表示に切り替える。点滅しているのなら、時間は前に進んでいるはずだ。

ところが、07秒から08秒に進むことはないみたいだ。

「基地局がやられたのか」

何に？

「新手のスタンド使い？」
「ばかな。」

「.....」
意味のない独り言は、静まり返った空気に、ゆっくりと溶けていった。

冷静になるよう、自ら言い聞かせる。

意味不明な状況の唯一の救いは明かりが灯っていること、電気は

通ってるんだ。そうだ、何の問題もない。電話だって通じるだろうし、携帯の電波状況はバリ3だ。

聞いたことがある。少し前にイタリアのシチリア島で時間が15分ほど早く表記される謎の現象が起こったそうだ。電力網になんらかの影響が与えられて発生した事案だそうだが、いや、あれはたしか、デジタル時計オンリーだったか……。

「テレビ、テレビは」

呟くと同時に、テーブルの上の新聞と一緒に放置されたりリモコンに手を伸ばし、希望を込めて電源ボタンを強く押す。彼の一樓の望みを裏切るように本体の30インチはウンともスンともいわなかった。

その認めたくない現実が、続々と脳裏に嫌な予感を植え付けていく。

稲葉冥利。

彼女の名が浮かぶのに時間はかからなかった。

この空間はあまりにも都合が良すぎる。電灯は灯るのにTVはつかない。時計の針は進まないが、時間の流れを意識することはできない。

俺が睡眠をとっている間に稲葉の催眠誘導能力とやらが発動したのだろう。

夢か現か、実際の感覚として曖昧なのがあいつの力の恐ろしいところだ。

「くそっ」

関係を断ち切るような別れ方をした手前、今更彼女とかかわり合いになるのはひどく億劫で、煩わしい出来事ではない。

結城は舌打ちをし、ソファアに腰を下ろした。

ほっとけば、向日葵たちが助けに来てくれるだろう。だから、今はなにもかんがえずに、呆けていればいい。

他人任せな希望的観測を結論に、長いアクビで締めようとしたとき、ふとした疑問が沸いてきた。

「この家は、俺の見慣れた空間だ。」

「……」
今まで彼女が造り出した空間の共通点は全て稲葉冥利のイメージするそれっぽい情景という点だ。一番初めは2年1組の教室を具現化してはいたが、あれは実際の空間を彼女が知っていたからイメージするのは容易かつただろう。だけど、ここは、確実に俺の家だ。間取りから家具の配置、壁の染みや、三歳のときにつけた柱の傷まで、いくら彼女の想像力がたくましかろうと、ここまで詳細に作り込むことは不可能だろう。ましてや、女子をウチに招待したことも、結城にはない。

なのに、なぜ、なんで、どうして、あり得るはずがない。知りもしない稲葉冥利に、結城裕也の世界を構築することなんて不可能なのだ。

血の気が引く、とはこの事をいうのだろうか。半分以上、ホラー小説の導入だ。

すぐるように携帯をネットワークに繋げようとするが、画面は接続中から移動することはなく、キーが汗でぬるぬるになるだけだった。

俺は、イマドコにいる？ここはほんとに家なのか？起きているのか？寝ているのか？何で時間が止まってるんだ？なんで誰も帰ってこないんだ？なんで、なんで、なんで……！？

こんな自問を続けていては、狂ってしまう。手っ取り早く確かめてみよう。

自動車の音も、風が木の葉を揺らす音もしない。無音。そんな世界に飛び出すのは勇気がいるが、なにもせず、あれこれ思考を巡らせるよりましだろう。結城は玄関でローファーを履き、現実を確認するため、外出を開始した。

煌々と、街灯が夜道を照らしている。

それ以外、世界は異常で満たされていた。

まず、音がしない。風がない。青葉の豊かな香りがしない。人がいない。

例え深夜だとしても、虫の声さえないのは異常であろう。草木も眠るなんて表現があるが、あれは只のもの喩えだ。

歩けば、歩くほど、結城は目眩を覚えた。

ひとつの救いは地理的には、彼の住む羽路市の見慣れた町並みという点、だからこの先どこに何があるのかもわかっている。

入り込みミラーで作られた鏡面世界のようにだった。

自分の知ってる界限なのに、拡がるのは見慣れぬ景色。頭がどうにかなりそうだった。

「あつ、人？」

中途半端に国道を照らすオレンジ色の光りが、薄暗闇にぼんやりと人形の影を浮かび上がらせていた。歩道の真ん中で立ち尽くすその人物、一瞬作文部の誰か誰かかと思っただが、どうやら違うらしい。大柄な男だった。遠くで顔はうかがい知れないが、その体格は中学生のものではあり得ないほど、がっしりとした筋肉質だ。

もちろん怪しいとは思った。この空間が稲葉の造り出したものだとしたら、それに存在している時点でただ者ではあるまい、向日葵たちや桃と同じような夢に干渉する能力を持ったものか、稲葉冥利の想像上の人物か、の二択である。

わかつてはいるが、一般的な遭遇を、結城は素直に喜んだ。

「すみません、あの……」

会話の出だしに何を選べばいいのかわからなかったが、純然たる安堵を抱いてその人物に話かけてみることにした。

正面から男と顔を合わせる。

「ここって羽路市内ですよね？」

男の顔面はくすんだ包帯が巻かれていて、作業服のようなビブ・オーバーオールを着込んでいた。アメリカの農夫がよくある格好みたいなものだ。紺色はオレンジに照らされ褐色じみた色になっていた。

「っ」

「……」

不気味な様相に結城は絶句する。質問には答えず、男は大きな腹ポケットに右手を突っ込んで引き上げた。

「あ、あんた、は」

その格好には見覚えがあった。正確には、綴ったことがあったのだ。ジェイソンやフレディのようなスプラッタホラーに登場するビザール殺人鬼を意識して造り上げられた、キャラクター。

男の手にはアイスピックが握られていた。

「おいおい、冗談だろ！」

男は尚も無言。

アイスピック男は結城裕也が創作した架空の怪人である。稲葉冥利に読まれた自作小説の題材の登場人物の一人だ。

最大の特徴は名前にもある凶器のアイスピック、そして、小説の中での設定では、彼はイカれた連続殺人鬼。

男はしなるような腕の動きで、まっすぐ躊躇する様子なく、先端の尖った部位を結城の喉目掛けてつきだした。

夢の中で傷つけば、現実にも。

間一髪避けた彼の脳裏に耳にタコができるほど聞かされた向日葵の忠告が甦る。

「嘘だろ！」

死への恐怖か、はたまた自分の妄想の痛々しさか、結城は泣きながら踵を返して、走り出した。

アイスピック男も、結城に続くように走り出したのが、足音でわかる。ホラー映画の怪人同様足は早くないので簡単に巻くことができたが、突き当たった問題は悪化の一途を辿っていた。

帳のなかて

月は出ていない。街灯の光だけがたよりだ。

短距離走のペース配分を考えない勢いのある足音のみが響く。二酸化炭素に混じって全てを吐き出すように、結城は闇夜を駆け抜けた。

追跡者はまけたらしいが、それでも安心はできなかった。

アイスピック男のことは俺が誰より知っている。

だってあいつは、自分の想像上の人物のだ。

早鐘に変化した心臓と荒い呼吸を整えるため、電柱に崩れるようもたれこんだ。小説の中のアイスピック男は、怪人の例にもれず、神出鬼没に設定している。厄介だ、と頭を抱えても、何事も好転することはない。

実際に命の危険に晒されているのだ、冗談ではない。

「稲葉だ」

解決案は直ぐに浮かんだ。

そもそもこの夢（現実には感じないが）は、稲葉冥利が結城の自作スプラッタホラー小説に感慨を受けて構築されたものだ。ならば、脱出の鍵は誰がどう考えても彼女が握っている。

それに、事態はまだ最悪というわけではあるまい。

稲葉の夢ならば、桃や日向が助けに来てくれるはずである。

あいつらならば、経験則としてエマーゼンシーの対応も抜群だろ。

助け船が遅いのはちょっと喧嘩中だから、に違いない。いつもの感じと違うのも、彼女たちなら訳を知っているやもしれん。

早く助けに来てくれよ……、結城が情けないため息をつくと同時に、ポケットがバイブレーション機能で小刻みに震えた。

音に驚きながら、慌てて画面表示をみるとディスプレイには番号だけが表示されていて、未登録の着信であることを知らせてい

た。いくらかけても繋がらなかった電話機能、このチャンスを見逃すことは出来ない。

一抹の不安を感じながら、結城は通話ボタンを押した。

「もしもし」

『ユーユー？ユーユーだよね？』

「向日葵……？ああ、そうだ、俺だよ」

安心の声が出そうになるのを必死でこらえて、結城は、電話の向こうの少女に感謝した。

「あれ、つうかお前何で俺の番号知ってるの？」

『細かいことはいいんだよ！それよりどこにいるの？』

連絡先を交換した記憶はないが、電話番号ぐらいクラスメートに尋ねればすぐだろう。

「稲葉の夢の中にいるっぽい。早く助けに来てくれ、厄介な状況なんだ」

一瞬電話向こうで息を飲む音が聞こえた。

『あー、やっぱり』

「やっぱりってどういうことだよ」

『あたしたちにも状況がよくわからないんだけど、ユーユー、どうやら夢に干渉するのが難しいみたいなんだ』

戸惑いが、声に滲む。

「どういう、ことだ」

『いい、落ち着いて聞いてね』

短く前置きしてから彼女は続けた。

『今回の夢は今までのそれとは密度が違う、少なくとも奈黒町のやつと同レベルかそれ以上、……手に負えない』

「おいおいおい、ほんとにやめてくれ。今までのことは全面的に謝るから。ドツキりだろ、な？」

人並みのプライドは持ち合わせているつもりだが、結城はすでに涙声だった。

『あたし達もベストを尽くすからもう少し待ってて！出来る限り早

く助けに行けるよう努力するから』

気休めにもならなかったが、かといって怒鳴り付けるのは筋違いだ。曖昧に頷くことしか出来ない。

「そうだ。稲葉を叩き起こしてくれ！そうすれば、」

『まず、こつちの状況を説明するね』

昼間のことを怒ってはいないようだが、早口な彼女の言葉に結城は耳を傾けるしかなさそうだった。

『昼休みくらいかな、冥利、気分が悪くなったらしくて保健室に行くことになったんだ』

「……」

ガキみたいな理由で稲葉冥利を傷付けて、逃げるように早退したあとの状況。別れ際の困惑した表情がまざまざと思い起こされる。

悪いのは、全部、俺だ。

『あたしと桃ちゃんは見舞いがてら様子を伺おうと彼女が寝ているベッドを訪れた』

ためるように息を一回切った。刹那の沈黙が、耳障りな静寂を植え付ける。

『だけど、冥利の姿は保健室になかった。養護教諭に話を聞いても早退した記録はないし、学校中を探し回ったけど、彼女の姿は見当たらなかった』

「つまり、行方不明ってことか？」

『失踪したんだよ。ただいま目下捜索中。外履きが下駄箱にあるから校内にいると思うんだけど』

「俺が夢に巻き込まれてるってことは、あいつどっかで寝てるってことだよな？」

『それを予想して、干渉を試みたけどうまくいかなくて……。卵の殻をイメージしてもらえれば解りやすいんだけど、ユーユーを束縛している夢はアクセスが易々とできないくらい密度が濃い。これだけ質量のある夢、原因に何か強い精神的要因があるはずなんだ』

時計の止まった時刻が、ちょうど昼休み終わりくらいなのを思い

出す。同時に、その精神的要因の心当たりを彼は得ていた。

『ユーユー、それでそっちはどういう状況なの？』

「あ、ああ、俺は」

結城は自らのおかれた状況を端的に伝えた。胸にできた後悔という名のしこりを誤魔化すよう、言葉だけがスラスラと出てくる。

『なるほど、それは驚異だね』

自分の造り出した殺人鬼に命を狙われる信じられぬ状況、聞き終えた日向はそう言うてから言葉を続けた。

『そのアイスピック男を読んだことないからなんとも言えないんだけど、ユーユーの作った話なら誰よりもユーユーが詳しいはずですよ？』

「そうだが、しかし」

『だったら大筋通り完結させればいいんだよ。モデルが存在してる時の夢はストーリー通りにすればいいから楽なんだ』

「……」

『どしたの？黙りこんじゃって』

ホラーというジャンルすべてに言えることだが、物語の完結が常にハッピーエンドとは限らない。

アイスピック男も、最期は主人公の善戦虚しく残虐なラストに飾られている。

『だから、例えばさあ、主人公が手にしてた武器を使ってそいつを倒せばいいんだよ！再現すりゃいいのさ、簡単でしょ』

そんな彼の気を知らず、日向は至って明るい声を上げた。

『でも注意してね、いくら夢だからといっても傷付けば、現実のユーユーも同じところに傷を負う確率が高い。とくに、冥利の念波は脳の誤作動を引き起こし、一種のブレインロックを』

「だああー、さらに生き残り難易度をあげんなあ！」

ジョークみたいな言い回しとは裏腹に状況は切羽詰まっていた。

『え、だけど、ストーリーに矛盾を起こさない程度に行動すればいいだけだよ』

「そうはいかないんだ、もしそんな行動とつちまったら、俺の命は、
」
頭上で、がきんと甲高い音がした。

言いかけた言葉を唾とともに飲み込むと、冷や汗がどつと吹き出した。恐る恐る視線をあげると、白い光に反射するアイスピックが、電柱に深々と突き刺さっていた。

しゃがんでなければちょうどこめかみにあたる部分に、小さな穴が開けられている。柄は一本一本が太い指に握られていて、野犬の唸り声如く呼吸音が耳をついた。

「でやがったあああ！」

慌てて立ち上がるうとするが、休息を甘受していた足はすくんでうまく動かず、彼は無様に前のめりになって転んでしまった。弾みで携帯を落とし、存外大きな音が静けさに支配された住宅街に響き渡る。

背後に迫るアイスピック男は、悠々と電柱から、突き刺さった凶器を引き抜くと、包帯の下の唇を醜く歪めた。

「ないないない！」

結城は腹の底から叫んで後退りを必死で行う。

「ないないないない！」

『何があつたのユーユー、だいじょ』

アイスピック男は地面に転がった結城の携帯電話を突き刺した。ヒビが入った端末は再起不能を物語っていた。

「誰かを傷つけるのはフェアじゃないって、お前言ったじゃんかよおっあ」

しゃがみこんだ男の隙をついて結城は立ち上がり、創造主たる少女に文句をたれながら脇目も降らず走りだした。

夢の中では思うように体が動かず、もどかしい思いをするのが一般的ではあるが、稲葉冥利の世界においてはその限りではないらしい、煩わしさは感じなかった。

体力に自信はないが思いつきり走ることができる。

せめてもの救いは前述の通り、敵となるアイスピック男の足を遅く設定していること。これは単にゆっくりとした相手の方が読み手の恐怖を煽ることができから付加したものだ、こうなることがわかっていたなら、火に弱いとか水に弱いとか鈍弱が切れないとか、そういった分かりやすい弱点を付け加えればよかつたと、結城は後悔した。

走りながら必死になって作戦を練る。

ストーリー通りに完結させるのは簡単だ。死んでやればいい。

それが叶わないなら、思考を巡らせるしかない。完結のヒントとして、大まかなストーリーを思い出す。

小説の中の主人公、孤独に相対する少年は、家族を奪われ、自身もまたターゲットに含まれていることに恐怖を抱いている。一方で復讐を誓い、謎を解明しながら、アイスピック男と向き合う、大まかな流れがこれだ。

最期はあと一歩というところを爪を誤り、無惨なラストを迎えることとなる。

「そうだ、消火器！」

1つ思い出したことがある。物語の後半、学校に追い詰められた主人公は校舎備え付けの消火器で、アイスピック男を一度撃退していた。すなわち、消火器という武器は、有効的な手段だということを示している。

辺りは住宅街で、消火器を見つけ出すのは骨が折れそうなので、気乗りしないが結城は舞台通り羽炉中学に足を向けた。学校ならば、広いぶん存分に逃げ回ることができる。

昼間の見慣れた光景とは対照的に街灯の灯りが届いていない夜の校舎は、暗闇に溶ける不気味な存在感を漂わせていた。校門を乗り越え、エントランスに向かう。警備システムは予想通り稼働することとはなかったが、最大限の注意を巡らせて、玄関のガラス扉に近づ

夢の中とはいえ不法侵入している後ろめたさを、在校生だから、
と言いつ聞かせ、扉に手をかける。

「あれ」

施錠されていて、開けられなかった。

「畜生、変なところリアルに設定しやがって」

ため息をついて、別ルート探索を脳内で開始した直後、墨汁を垂らしたように黒い校庭の真ん中に、何者かが立っているのを視界におさめた。ゆっくりと近づいてくる大柄の男、アイスピック男だ。血の気が引く。校門から出るにはアイスピック男とすれ違わなければならぬ。退路を断られたのだ。

慌てて扉をガチャガチャさせるが、ドア開くことはない。

「おいおいおい！稲葉あつ！」

アイスピック男はじよじよにその距離を縮めている。

「開けるよあ！てめえ、俺がわるかったからよあつ！」

裏口までいく時間はないし、校舎に侵入する別のルートを思い浮かばない。万事休すだ。

「開けゴマ！アブラカタブラ！アロホモロ！稲葉の心の扉にアバカムっ！」

扉は開かない。ガラス戸といえど、割っている間にアイスピック男の餌食になってしまうだろう。

「ちくしょう！」

惨めすぎる人生の終わりに、悔し涙が、瞳に滲む。

「こんなところで、謝ったって……」

力が抜ける。

「俺は、現実のお前に謝りたいんだ」

ズルリと扉にもたれかかる。アイスピック男はもう目の前だ。

「屑みたいな、幕切れだったな」

いまわの言葉は偽ることのない彼の本心だった。スタスタにされたプライドを、取り戻すため少女の心をもてあそび、拳げ句八つ当たりをおこなって、彼女からの復讐の檻に入れられる、自業自得と

しか言い様のない。

「稲葉、ごめん……」

届くことのない謝罪を行った途端、背もたれにしていた扉が開き彼は勢いよく、校舎のなかに転がり込んだ。

「ぬわあっ！え？開いた？アバカムが効いたのか！？って、うおっ
！」

感傷に浸る暇をあたえず、アイスピック男も扉を押し開け校舎に侵入してきた。

鬼ごっこが再開したのだ。結城は涙を拭って、廊下を駆け抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9220v/>

じゅぶないる作文クラブ

2011年11月10日03時13分発行